

2026年6・7月を
新発表!

山を愛するすべての人に贈る、
心躍るハイキングへ

コース番号・媒体番号

ET301T-60(電子ブック)
ET301TC-60(紙版)

スマホからスグアクセス!!



ホームページ24時間受付中

版急 DM8915 特価

ピレネー山脈の絶景ハイキング・トレッキング体験 10日間

添乗員+ハイキングガイドの2名サポート体制で5つの絶景ハイキング・トレッキングへ

6・7月はまさに花のベストシーズン!!



6・7月の見頃

Day6 > オルデサ国立公園

スペインで2番目に歴史の古い国立公園で、氷河によって深く削られたU字谷や、高さ1,000メートルにも達する断崖絶壁が特徴です。特にオルデサ渓谷は、切り立った岩山と緑豊かな森、清らかな川が織りなすダイナミックな景観が魅力です。



5つの絶景ハイキング・トレッキングへご案内

添乗員+ハイキングガイドの
2名サポート体制!

往路: 復路:

トレッキング 3

Day6 > オルデサ国立公園トレッキング
◆歩行距離: 約14km ◆歩行時間: 約6時間 ◆標高差: 約500m
◆最高点標高: 1,700m ◆お手洗い: スタート地点(レストラン)に有



ハイキング 5

2026年新ルート!

Day8 > ラ・コマでの湖を望むハイキング
◆歩行距離: 2.5km ◆歩行時間: 約2時間 ◆標高差: 約300m
◆最高点標高: 2,300m ◆お手洗い: スタート地点に有



ハイキング 1

Day4 > ゴープ湖ハイキング
◆歩行距離: 約3km ◆歩行時間: 約2時間30分
◆標高差: 約325m ◆最高点標高: 1,725m
◆お手洗い: スタート地点とゴープ湖にあるレストランに有



ハイキング 2

Day5 > ガヴァルニー大渓谷ハイキング
◆歩行距離: 約8.4km ◆歩行時間: 約3時間30分
◆標高差: 約220m ◆最高点標高: 1,570m
◆お手洗い: 折り返し地点(レストラン)に有



トレッキング 4

Day7 > ピレネー山脈最高峰アネト山を望むトレッキング
◆歩行距離: 約9km ◆歩行時間: 約5時間
◆標高差: 約324m ◆最高点標高: 2,074m
◆お手洗い: スタート地点に有



各出発日
| 最大 |
22名様
限定!!

早期申込割引!!
2026年4月以降の出発日を
2025年12月までにお申し込みいただくと
旅行代金からおひとり様
1万円引き!!



◇プロローグ

「花の好きな友達に、ピレネーに誘ってもらってからよ」

15年前、キリマンジャロに余裕で登っていたマロン・ガールKさんの山歴を聞いたら、そんな返事が返ってきた。

ピレネーって…受験知識ではスペインとフランスの国境。そして山歌の「ピレネーの山男」でしか知らない。

♪ ピレネーの山の男は いつも一人 雲の中で
霧に濡れ 星を眺めて
もの言わず 伐るは樅ノ木
ハイホー ハイホー 千年の古い樅ノ木

ピレネーの山の男よ いつも一人 何を思う
雨降れば 小屋のほとりに
髭なでて 昔を語る
ハイホー ハイホー 思い出の愛のコマドリ

阪急のカタログに、そこへのハイキングを見つけた…。標高 2000m 前後のハイキングの梯子だった。



《ガヴァルニー渓谷にて》

＜世界の山の足取りを振り返れば…＞

どうせ大枚を払うなら 8000m 級の山を見たかった。
辛い方から先に…もあって、行き先はネパール。ワン

ゲルの後輩 OB がアルパインツアーサービス名古屋所長だったので、そのカタログだけにする。その頃のヨーロッパアルプスの印象は、高額だし、やたらロープウェイやリフトが付いているし…だった。

しかし天下のアルプスを、知らずのままもやれない。靴が多い（難易度が高い）を基準に、2012 年はオートルートという、シャモニーからツェルマットへの峠越え縦走ツアーを選んだ。それなりにハードだったものの、周囲の設備の良さが、遊園地に見えた。汗も流さず絶景を見て優雅に食事…が、気に食わない。こんなのはもういい…となり、ヨーロッパに関しては、友人達との観光旅行専一にしていた。

翌年、ネパールのゴラパニ峠へ行った後、尊敬する先輩の脳梗塞の報に驚いた。山遊びどころじゃない、老後準備が先だ！と、急遽我が家リフォームに励む（この英断に、今は大助かりしている）。でも、その際、物の移動で腰を痛め、また、スキーでのリフト降り損ないで上腕骨骨折をやってしまった。

すっかり歩行スピードが落ちてしまい、いよいよフラワートレッキングに鞍替え。そのレベルだと、クラツォの方が本数が多いし、その分、いい現地ガイドも確保しているようだ。

そこへコロナ禍のブランクが挟まってしまった。

2024 年、ツアー再開時には、残り時間と体力が、焦りの段階に入っていた。どんなメニューがあるのか？
おお、ドライ・チンネ（トレチャーメ・ディ・ラヴァレード）のハイキングがある！



《ベナスケハイキング》

見栄えのいい山と花…が、ヨーロッパアルプスなら叶うのだ。そこは、イタリア北部のドロミティー山群。しかし、直行便のクラツーは成立せず、乗り継ぎ阪急の方が、本数が多いと知った。でもそちらへの乗換が遅れたばかりに、最適期はキャンセル待ちばかり。空きのあった初回ツアーに参加としたら、今度は時期が早すぎて、ハイキング路は雪で埋まり、吹雪の峠越えだった…。(2024 年は、晩春の天候不順だけではなく、夏にも、洪水や山崩れが多発していたのだ。)

その際、見比べたカタログには、行ったはずのスイスなのに、覚えのない光景ばかりが載っていた…。昔、突っ張ったコースを選んだばかりに、平均レベルの観光がかえって抜けてしまっていたのだ。ユングフラウや、ベルニナを見ていない！2025 年、それを消化した。



《ピック・ドウ・ミディのロープウェイ》

これで心安らかに山岳番組を見られる。高額と長い飛行時間から、アルプスは卒業とも思った…。いや、あの「ピレネー」が残っている！2026 年のピレネーは、そうやって浮上したのだ。

＜一筋縄ではいかない…＞

出遅れてキャンセル待ちになったのには懲りていたから、申込は早かった。9 月のことだ。1 ヶ月前まで、無料キャンセルできるのだから、13 万円強を預けておく…のつもりでいいのだ。ただ、この早すぎる段階で友人までを、巻き込めない。高い「おひとり様部屋追加料金」も覚悟のうえだった。



《シベナガムラサキ》

明けて 2 月、バリ島行きが叶う。それが楽しかった啓子ちゃんが、4 月の三宅島、5 月の玉龍雪山、6 月のピレネーに乗ってくれることになった。

昨年を自覚症状なしで過ごした彼女は彼女なりに、「目標をたてて生き抜く」の覚悟を決めていた。

私は私で、3 月で退職が決まった。一時は、次の仕事を探そう…とも考えたが、周囲を見るに、「体が自由に動く」が、もう限界に来ている…の方を認識した。ここで迂闊に仕事や趣味に関わったら、そちらの都合で躊躇して、ツアーに乗れなくなってしまう…。あらゆることに、「とき」があるのだ。

北観のツアーをさらに挟んで、体力づくりと、「行けるうちに行く…を最優先」の上半期とする！と、私も覚悟を決めていた。

それが、日中関係悪化で、5 月の玉龍雪山が中止になり、スケジュールが狂った。突然インドが浮上し、6 月は、礼文島から中 5 日おいて、玉龍雪山へ。また中 5 日おいて、ピレネーへの過密になってしまった。

ピレネーの勉強など…時間がない。疲れをとる…どころか、たまった雑事に追われてしまう。自ら招いたことだから、「疲れた」もこぼせずに黙々と、トランクにまた詰め直した。

でも、中国から帰国の翌日には写真を 100 枚選び、加工してくれる先輩に送信。彼の速攻仕上げのお蔭で、帰国報告と、記憶の簡単整理はやれた。その分、さらに時間が詰まってしまった。

意地でも、勘違いをしない！混乱させない！…そう、遊びのはずだったのに、いつのまにか「意地でも」でこなしていた。それが「私らしさ」のようなものかもしれない。



《モンジュイックの丘》

ところで、一見こだわり抜いたようなピレネーなのに、具体的な山資料がないのだ。いつもの「地球の歩き方」フランスに、ピレネー山脈は半ページだけ。スペインにはなかった。山岳観光が第一義のスイスに対し、フランスもスペインも、膨大な歴史と観光地がある。その国の山遊びなどは、物好きの範疇になってしまうのだ。

阪急のチラシによれば、その中身は5回のハイキングとトレッキング。略図では、3回が往復ルート、1回が往復＋ゴンドラ部分を徒歩で降りる、1回が周回だった。

4日目 ハイキング中級 ゴーブ湖ハイキング
歩行距離；約3km 歩行時間；約2時間30分
標高差；約325m 最高点標高；1,725m

5日目 ハイキング初級 ガヴァルニ大渓谷H
歩行距離；約8.4km 歩行時間；約3時間30分
標高差；約220m 最高点標高；1,570m

6日目 トレッキング中級 オルデサ国立公園T
歩行距離；約14km 歩行時間；約6時間
標高差；約500m 最高点標高；1,700m

7日目 トレッキング初級 ピレネー山脈最高峰
アネト山（3408m）を望むトレッキング
歩行距離；約9km 歩行時間；約5時間
標高差；約324m 最高点標高；2,074m

8日目 ハイキング中級

ラ・コマでの湖を望むハイキング
歩行距離；2.5km 歩行時間；約2時間
標高差；約300m 最高点標高；2,300m



《キリアタ・ノミノツヅリ》

追加情報では、4日目、6日目は、自由行動で村散策でもよいとなっていた。縦走ではないのだから、天候、体調を見て、適宜パスで対応すればよい

なお、阪急のピレネーのツアーは、2種あった。「ハイキングはガヴァルニ大渓谷のみで、後は全て観光の8日間」…というのもあったのだ。「ハイキングばかりの10日間」が2本に対して、そちらは8本もあり、おひとり様限定も8本が設定されていた。

実は私は最初、一般向けといえるそちらを申し込んだのだ。その後も逡巡が消えない。当然に、ハイキングばかりの方が、もう行けないであろう可能性が高かったからだ。老いの下り坂とは、煩惱とのせめぎ合いだ。適宜パスをやるし、春から気合を入れてトレーニングをすればいい！と考え直し、「ハイキングばかり」に鞍替えをしたのだった。



《カルツシアノルム・ナデシコ》

さらには、5月のインドツアーから帰った時に、ワングル OB の白山企画の知らせが入った。南竜で2泊なら、随分とゆっくりできる。また、仲間に我が家まで送迎してもらえる。

実は、2010年6月26日の夏山開き前の時期に、啓子ちゃんは、白山日帰りをやっている。それは付高卒後40周年同窓会のOPだった。最初は医者二人付きの触れ込みだったのに、ばたばたと参加者が減り、参加者は啓子ちゃんのみ。北大山とスキー部OBの武藤氏と私がエスコートし、実現させた。頂上から幹事に電話を入れたら「嘘やろう！」と言われたくらい…58歳の体力なら、散歩の延長感覚でやった快挙。でも時節柄、雪ばかりの山頂部で、強風で吹き飛ばされそうな日で、実にトレーニングそのものの登山だった。花の白山を見ないまま…というのも…煩惱は増殖。

「次は、百花繚乱の白山、花の名山の三本指に入る白山の方をぜひ見てね」と、啓子ちゃんを誘う。

その参加確定は、ピレネーでの結果次第となっていた。まあ、メイクドラマってことだ。人生にどんな花を添えるか？決められるものなら、綺麗な色をつけたい！



《ケシの仲間》

傍目には調子に乗って次々と…かもしれないが、煩惱のままに考えた。高齢者の筋肉は、逡巡の間にも落ちる一方なのだ。筋力をつけたら、その維持をしたまま、次の行動へ行く方が、高止まりで維持ができる。昔、エヴェレスト街道のゴーキョで高所順応できたなら、そのままカラパタールと、チュクンを済ませた方が、無駄がない…と考えたのと同じ発想だ。そして、

目的がないと、運動しよう！…の弾みもつかない。怠け心との闘いでもあるのだ。

この半年は、「旅に出る」を続けて、ハイの状態を維持しよう！だった。すでにその作戦の終盤にきていた。

さて、阪急の加藤 TL からの事前挨拶電話が入る。集合は19時45分だが、その1時間前から、ブースにはいること。参加は18人で、内、関空からの合流者が6人いること。ルルドが35℃と猛暑になっている。基本は夏服とし、重ね着で対応するように。ガイドは両替しないので、日本でユーロに両替しておくように。5€など小銭が有用で、日本円は1000円札で用意するように…の指示があった。



《マヤリス・ハクサンチドリ》

◇6月21日（日） 金沢～羽田～イスタンブール

「気をつけて行ってこいよ」

休日で、トランク荷物ありなので、夫に駅まで送ってもらう。留守で不自由させるのに…苦情は言わない。私が、「遊ぶ時も、全力投球でクソ真面目」…のあたりを理解してくれている。

私は、人には「姑の世話もして、旦那には十分に貸しを作っているもんね」と茶化しているけれど、昭和の夫は、妻のケア労働を当たり前と思っている人も多いらしい。

夫がいい人でよかったと思っている。人生を助け合って生きてきて、それぞれの夢の応援もし合い、いい人生だった…にしていくながら夫婦の醍醐味だ。ちょっと対立したからすぐ離婚では、夫婦の味も出てはこないことだろう。そして、山あり谷ありの人生を、共に越えていくものだ…の子供への手本にもならないことだろう。

羽田まで、乗り継ぎは最少歩数で動く…それくらい、今年は旅と旅が接近していた。そして、啓子ちゃんとも無事合流。啓子ちゃんは山での夏服の意味がわからず、捨てても可で調達したそう。私も、玉龍雪山の荷から、長袖を抜き取った程度だった。

まさに集合時刻の 1 時間前に加藤 TL の前に立った。そこからターキッシュエアラインの C ブースへ行ったら、もう長蛇の列ができていて「ここが、ターキッシュの最後尾ですか？」の念を押したほどだった。ハブ空港としてのイスタンブールへのターキッシュは、エアバスで、大量の客を運ぶのだ。また、既往症を持つ人の健康診断書の提出が、ターキッシュエアライン宛てに必要ともなっていた。それが、根っからの商人、トルコの知恵かもしれない。高齢観光客ほど、急変の危険を抱え、かつ、クレマーになる。

オンラインで座席確保ができるが、その薄っぺらなチケットをプリントアウトしても、荷物を預ける…は、チェックインカウンターに並ばねばならない。離陸の 3 時間前には並ぶ（ビジネスなら、別格扱い）…が常識になりつつあるようだった。出国審査は自動化されたが…。ペットボトルは没収されるし、バッテリー、スマホなどのチェック…各所での待ち時間が多いし、緊張しつつあちこちに移動しなければならない…。こちらは「慣れる」ではなく、「うんざり」が蓄積されていくように感じる。

チラシでの経費はエコノミーが 599,000 円、ビジネスが 1,394,000 円。ホルムズ海峡封鎖で上がっていった燃油サーチャージは、48,000 円から、69,800 円に。最終的にエコノミーでの支払い総額は 696,600 円だった。結局 18 人の中に、ビジネスは一人もいなかった。

た。連チャンハイキングをやろうとする人に、ビジネスで体を休めておこうと発想する人はいないらしいかった。

唯一ラウンジを使った男性は、現役時代の会社のラウンジパスを持っていたからだった。5 人の男性が、13 万円の一人部屋料金を払って、参加していた。



《アルピナ・ウンラン》

21:45 成田発で、13 時間搭乗。イスタンブールで、マイナス 6 時間にして、5:05 着。加藤 TL からのメモには、「出発後 1 時間半と、到着 2 時間前に機内食が出ます」とある。ひとまず、夕食と朝食相当と考えていいのだが…そしてその間は睡眠と解釈してよいのだが…。これらの時差や攪乱も高齢者には、徐々に負担となっている。

恒例、機内映画の本数は多かった。ただ、あちら系が多くて、「日本語」が選択できる映画は少ない。また、日本発であっても、日本人従業員はいなかった。乗客に、日本人が明らかに少なかった。たしかに円安が影響しているようだった。

◇6 月 22 日（月）～トゥールーズ～ルルド

人種の坩堝イスタンブールの空港は大きい。ともかく、はぐれないように…乗り継ぎのゲートへ。関西組と合流できた。そして、フランスのトゥールーズへ。3 時間 40 分をかけ、さらにマイナス 1 時間として、10:20 着。

11:30 ようやく大型バスに乗り込む。席は 2 列目、3 列目だけを交替の指定席とし、あとは自由。



地球の歩き方より

街並の案内に、セリーナさん、ドライバーは、この後ずっと同行のデニートさん。TLはTLであって、ガイドは現地のガイドが務めるものになっている。また、バスも4時間運転後には30分のエンジン停止など、労働者が守られている。

この近辺では一番耳にしているのが、サンティアゴ・デ・コンポステラ街道かもしれない。フランスからピレネーを越えたスペインの西の果て、サンティアゴ・デ・コンポステラを目指す巡礼路が4コースある。そのうちアルルからの「トゥールーズの道」が通る。巡礼者は通して2カ月かかる道を歩き、巡礼者の印が、杖とホタテ貝だ。

トゥールーズは、エアバスなどの航空産業の町なのだという。514000人の人口中、8万人がエアバス関連だそうだ。南西フランスの中心地であり、紀元前3世紀には、町が作られた。5世紀には西ゴート王国の首都になり、16世紀にはパステル（藍染料）の取引により、商業都市として繁栄を極める…とある。航空産業の他には、11万人の学生が集まる。フランス屈指の学生都市でもある。自分は知らない町だが、南西フランスの中心都市ゆえに、国際線も飛んでくる街になっているのだ。



《トゥールーズ市内》

プラタナスの大木が茂り、ガロンヌ川の流れる景色が品のいい街並みだ。張り巡らされた運河は、世界遺産になっているという。

検索してみた。地中海に隣接したトー湖までを結ぶミディ運河は、ブルボン王朝絶頂期の太陽王ルイ14世の治世時代である1694年に完成した。世界最古級の運河の全長は約360kmで、トゥールーズで、大西洋に注ぐガロンヌ川とつながる。ローマ帝国時代からの、地中海と大西洋を結ぶ願いが、この運河で実現したのだ。

レンガ造りの建物が夕日に輝き、「バラ色の町」とも言われるらしい。街並みのベランダは、綺麗な細工がされていて、エアコンの室外機がない。

つまり、エアコンはついていないのが、フランスであって、窓を締め切って、外気をいれない…で過ごしてきたのだ。



《世界遺産のミディ運河》

ところが、この4日ばかり非常に暑くなっていて注意報もでている。水分補給に気をつけてほしい。

ドライバーが冷たいペットボトル水 500ml を€1で常時販売してくれるとのこと。今月末からバカンスが始まるというが、40℃越えだったら、どこへ行くのだろう？

車窓から眺める人達は、避暑の服装もどこかお洒落、そして黒人が多い…やはりフランスだ。



《トゥールーズ市内》

スミレの香水も有名なのだが、今回は、昼食にレストランに寄るだけで、ひたすらルルドへ向かうのだ。

レストランの2階へ。毎回飲み物を注文する生活が、また始まった。なお、これから行くホテルの水は全て飲めるという。だから、水のピッチャーがまず置かれもするのだ。

ワインのコルクで壁を埋めているのも、卓上の絵皿も、ちょっとしたことでお洒落。一人でサービスに励むヘッドスキンさんも、いかにもフランス人。大げさに肩をすくめたり、愛嬌をふりまく。

凝った前菜も、サーモンの主菜も、ピスタチオクリームのデザートも、おしゃれ。



《おしゃれな前菜》

18人はさすがに覚えられない。たまたまかは知らないが、それともハイキングのせいかな、珍しく男性参加者が半数を占めている。また、カメラに凝る人が多い。

(男性シングルが5名、女性シングル1名、姉妹が1組、私たちが1組、4組が夫婦のよう)

170km、2時間半走った先がルルド。聖水で聞いたことがあるルルドが、フランスでピレネーの麓など、まして知らなかった。上手な運転で、デニートさんが大型バスを狭い路地に横付けしてくれた。この町に、フランスではパリに次ぐ数のホテルが密集しているそう。ガイド本によれば…

1858年2月11日、ポー川のほとりにある洞窟の近くに薪を集めに来た14歳の少女がいた。その名はベルナデット・スビルー。突然彼女の前に現れた聖母マリアは、その後17回にわたって同じ場所に出現し、ある日「泉へ行って水を飲み、顔を洗いなさい」と命じた。洞窟近くの地面を掘ると泉が湧き始め、その湧き水によって病気が治癒する奇跡が何度も起きたといわれる。

それからこの小さな町は 170 カ国から年間 600 万人が集まるカトリック最大の巡礼地、特に病をもつ人々にとって重要な聖地となった。



《夕暮れの聖堂》

21 時から、聖域で「ろうそく行列」があるという。19 時からの夕食後、希望者が再集合して見に行く。夏至だから、まだまだ明るい。

葉には「奇跡を起こす力があるという地へ、人々がそれぞれ火を灯したろうそくを、祈りを持ち寄り列をなす、荘厳なセレモニーです。闇夜に揺れる行列のろうそくと聖堂の明かり。幻想的な雰囲気包まれて、感動をご体感下さい」とある。

ホテル前の坂を下り、交差点を渡った向かいが聖域だった。途中の売店にはたくさんのローソクが売られていた。



《灯りがともった聖域》

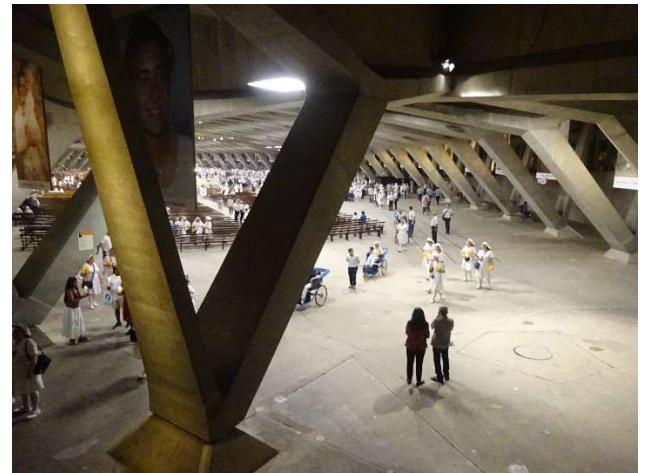
ルルドの説明は何一つ聞いていない（明日が本番）から、聖堂や、白衣姿が行き交うことや、下で水汲みをしているらしき…も、何のことやら？

広場の右奥の岩山には城塞が見える。昔から軍事的に重要な場所だったということだ。広場を見下ろす橋の、欄干の熱せられた石はやたら熱く、それ以上に、ひたすら眠くて仕方がない。ベンチでうつらうつら。

見下ろすマリア像に明かりが入り…でも、とりたてて集まってくるでもない。加藤T氏が、「様子を見えます」と、坂を下りて行った。

どうしようもなく「帰ろう」になる。そして雨天時にはミサ会場になる…という、地下バジリカ聖堂に寄ってみた。人や旗が次から次へと出てくる。25000 人収容の聖ピオ 10 世地下バジリカ聖堂は、びっくりするほどの広さだった。白衣姿も大量にいて、車椅子やストレッチャーを引いていた。

今日はあまりに暑かったので、会場を変更し、屋内でミサをやったということらしかった。



《バジリカ聖堂》

◇6 月 23 日（火） ルルド～ピック・ドウ・ミディ
～ガヴァルニー渓谷

トランクをフロント横に預けて、徒歩観光に出る。いかにもフランス人らしい、ロアさんがガイド。

ガイド本にあったと同じ説明を聞く。少女の証言は疑われたのだが、貧しくて学校にも行けず、まさに方言でしか奇跡を説明できなかった。その無知無学ゆえに、かえって真実そのままを語っていると、時の宗教者達に認められたのだという。奇跡はいくつもおきて、唯一無二の聖地になった。

また、聖人に列せられるには、死後腐敗しない…が、証拠といえる条件だが、32 歳で死んだ彼女はやはり腐敗することなく、修道女となったヌベール教会で、ガ

ラスの棺に眠っているという。ワックスを塗ったような皮膚になっているそうだ。



《聖堂とガイドのロアさん》

そもそもマリア信仰自体が、プロテスタントにはない、カソリックの信仰なのだという。

この辺りは、私には眉唾物なのだが、『サピエンス全史』を著したユヴァル・ノバ・ハラリは、人の集団が大きくなっていくうえで、神話・宗教が必要になった…と、説いている。ヒトが社会集団で生きる上で、「全員が信じる物語」が必要になる。物語の真偽は二の次だ。近代国家が整うほどに、生身の体の老・病・死・生きる苦しみといった煩悩や執着は大きくなった。より長生きするようになった時代には、より不健康をかかえ、救われない人が増えているともいえるのだろう。

そしてまた、神の子イエスではなく、市井人の聖母マリアの方が慕われるというのは…これまた、処女性が大事にされる世間規範とも、大きく矛盾した信仰なのだが…。

最近読んだ本…三宅香帆の『「夫婦」不在社会』にそのヒントらしきがあった。彼女は、昭和から令和にかけてヒットした小説、ドラマ、映画を分析したうえで、それらに「夫婦」は不在。男は父としてだけ描かれ、夫は究極不在。「母子関係」のみのうえ、「シングルマザー」が本分…と分析している。家族とは、水平的結合は希薄で、垂直的結合で維持される。見返りを求めず、命を繋いできたのは「母」。

病み衰えた者が縋るのは、子のイエスを産み、育み、看取った聖母マリアの方になるのだ。

昨日は前の橋止まりだったが、ロザリオ聖堂内に入って見た。キリストの生涯が描かれている。インドでのブッダの生涯図と同じだ。ベルナデットが見たマリアは青いベルトを前に下げていたので、青が、シンボルカラーにもなっているという。

聖母マリアが出現したとされるマサビエルの洞窟は、この聖堂の真下にある。そこは込み合っているから、ポー川を挟んだ対岸から説明するという。

たしかに、たいそうな人出だった。太くて長いろうそくを奉げている空間もある。葬祭を簡略化しようという流れがある中、祈りの形を行為にしたい人達、そんな心境になる時というものはある。



《ポー川を挟んで》

橋を渡り返した先には、ルルドの水で沐浴というのもある。その水浴場も列になっていた。9時からの開場に、5時半から並ぶという。水道栓があちこちにある。

いよいよ、洞窟前まで来たが、そこは青い幌をかけた車椅子がずらりと並んでいた。マリア像下には、各地からきた聖職者がミサを執り行っている。

あまりにナース姿が多いので、ここでは、ナース姿のコスプレでもやるのか？と、質問してみた。

ロアさんは「いい質問です」と言い、みんなボランティアなのだと答えた。ここには、ホテルのほかに、救護所というのも多く、5000床のベッドがある施設もある。全国から、いつからいつまでの、ボランティア

ア申し込みがあり、ネットに登録されて、運営されているようだ。



《洞窟前でのミサ》

人手が足りない日本の介護業界…。こういうのは、信仰というのが共有されていてこそ、可能かもしれない。

バジリカ聖堂は 1956～1958 年、ルルドの泉発見 100 年記念として建設されたという。新しいから、柱のない巨大空間を作れたのだ。アメリカ人の新教皇がいつ聖地ルルドを訪れるのか？それも関心事らしい。



《ガトー・ア・ラ・ブロッシュ》

帰りの土産物店で、ロアさんは、バウムクーヘンの出来損ないのようなのを指さした。串焼きケーキ（ガトー・ア・ラ・ブロッシュ）だ。ガイド本には、鍾乳石のように焼き上がる…と書いてあるが、今の段階で、壊れそうな土産は買えない。ルルドの泉の水を使ったという、ミント飴を買った。

10：55 バス発車。ルルドから 46km、1 時間半所用の、標高 2877m のピック・デュ・ミディに向かう。そ

こへのケーブルカーの昼休み時間を外して、先に昼食になるようだった。



《放牧地》

牧草地が続く。スイスで見ると、きれいに刈り上げた牧草地が、山頂まで続いている。山々の間に、山頂に設備のある岩山が見えてきた。つづら折りで標高が上がっていき、広い、いわゆる乗越にあたる部分（ラ・モンジー 1800m）にロープウェイ乗り場があった。一帯は、リフトが張り巡らされたスキー場だ。この雰囲気は、ドロミティーのソッサ・ポルドイと一緒に、自転車路になっているのも同じだった。実際、今年のツール・ド・フランスの走路になっているとのことだった。



《前菜》

昼食場所のレストランにむかい、その野外席に座る。前菜がやはりお洒落…ただ、彩りニンジンが固くて多すぎ。ここに、働き者の看板娘ちゃんがいた。もう夏休みで、両親の手伝いをしているのだろうが、よく気が付いてくるくと働いている。カメラマンたちがこ

の被写体に喜んだが、加藤 TL は「フランス人の親は写されるのを警戒します」と釘を刺した。



《看板娘ちゃん》

デザートはブラックベリータルトが大きかったの
で、ブラックコーヒー（アローチェ）€2.1 も頼んだ。
交換手数料をいれて、€1=200 円。再両替えできるけ
れど、飲み物にどう使っていくか？そういえば、小銭
の必要な案件に枕銭があったのだが、スマホ決済の時
代になって、この不思議な風習は消えたらしい。また、
啓子ちゃんは、ピレネーに行くと周囲に口外してこな
かったの、土産がいらないのだという。連チャンの
私も、留守を頼んだ息子だけで、口外していない。ど
ういう所かまだ説明できなくて面倒…もあったと思
う。



《ピック・ドウ・ミディ》

さて、午後の1番に乗るべく並ぶ。15分の乗車でタ
ウレ中間駅にて乗り換える。森林限界を越え、アルペ
ンローゼの花木も越えて、岩壁に迫り、展望台へ。こ
こで自由行動となり、帰りの最終便の時刻を告げられ

る。ここには 130 年の歴史ある天文台があり、また
2018 年には、空に掛かる浮橋の展望デッキもできた。



《展望デッキ》

ただ、解放されても、何もわからない。ピレネー山
脈は全長 430km、幅 100km の大山塊という。ちゃん
と、山、山、山が見えてはいるが、その中に、知って
いる山の名などはない。そして名だたる山は、アルミ
製の展望板に、矢印で表示してあるが、それも矢印の
先が、どの山をさしているのか？かつ、フランス語が
読めないのだ。知らないから来たのだけれど、知らない
…とは、実物を見てもそういうことになるのだ「オ
クシタニー地方の名所＝山だらけ」…だった。

レストランもあり、宿泊プランもあって星空観察が
でき、年内はすでに満室という。プラネタリウムも有
名らしいが…昼の 1 時間滞在ではどうにもならない。

下りた。避暑用のホテル、お店が少々はある。昼休
みが済んだ下のインフォメーションが開いていたが、
判るようなパンフもなかった。

かつて…その時は山主体のツアー会社だったから
か、地図はもらえるものだった。2.5 万分の 1 や 5 万
分の 1 の地形図が売られていたが、海外の地図まで調
達できるはずがなかったからだ。それが個人情報保護
法により、参加者名簿を渡さない…になり、次いで、
著作権に関わるとかといって地図ももらえなくなって
いった。

ガイドの後をついていくだけにしても、手掛かりが
ない。初めての地の、固有名詞や配置の手がかりなし
に、どう現地が理解できるというのだろうか？固有名詞

を文字として見ていれば、そこの説明をしていると解釈できるけれど…。



《ピック・ドウ・ミディ展望台》

例えば絵地図とか、概念図とかに書き直して、提供できると思う。どこを歩いているのかわからないし、迷子になっても、どこにいるとの説明ができないではないか！それとも、グーグルで、みなさん直ちにわかるほど、有能なのか？



《ラ・モンジー峠の花》

バス集合時刻まで、付近で花探しをやった。他のメンバーも、不明の山ばかりで早々に引き上げてきたらしかった。

しばらく走った峠で再度止まり、自転車のモニュメントとの写真を撮った。そこは、トゥールマレ峠。ガイド本（帰国後調達したガイド本。現地でこれだけの説明を受けてはいない）には、ピレネー山脈におけるツール・ド・フランスの伝説を築き上げた峠なのだ。1910 年ツールで初めて登場し、つまりは、ピレネー

山脈で最も標高の高い、舗装された峠なのだ。よって、80 回もコースに選ばれている。「ピレネーの巨人」という異名をもつ峠だった。



《トゥールマレ峠》

ここからの下りが、ヘアピンカーブの連続で、よくまあ大型バスでこんな所を走るもんだ！だった。こっちまでハラハラして、「中型バスでよかったのにねえ」と皆が漏らしていた。

ピレネーは、3 億 4000 万年前、バリスカン造山運動で聳えた山塊だ。板状節理の天然スレートが採れ、建築に使われている。また、良質の大理石も採れて、それはベルサイユ宮殿に使われたという。



《ガヴァルニー村中央部》

そこから 38km、橋で折れ曲がり狭い峡谷を遡ってガヴァルニー渓谷へ。樹々の間から、それと判る大岩壁が見える。途中には何本も石造りのアーチ橋が掛かっていた。

駐車の関係で、標高 1375m のガヴァルニー村を一回りしてから、ホテルマルボレに横付けする。日本語での「ル・マルボレへようこそ」が掛けられていた。このマダムはとてもお洒落…それはもう 10 年前の加藤 TL の記憶だが…の通り、銀髪に赤い口紅の小柄な老マダムがにこやかに迎えてくれた。



《宿の玄関》

リフォームした宿のキーは、開閉にちょっとテクニクのいる代物で、また、便座が超狭い空間にしつらえてあった。私でぎりぎり…欧米の巨体マダムだったら嵌まり込んで立てないかも？また、シャワーを浴びたら、後ろ向きになった途端、水栓に背中がつかえて、お湯が止まってしまう狭さだった。

老夫婦が仕切って、裏方はアジア系の従業員が働いているよう。大きなスープ壺が出てきて、それは注ぎ分ける。前菜はマスの燻製にイカのサラダ、メインデッシュは、たぶんカスレで、鳥肉入りの白いんげん豆のシチューだった。ここで連泊して、ハイキングに出る。



《夕食のシチュー》

◇6月24日（水）ポン・デ・エスパーニャ

パンは基本食べ放題だが、クロワッサンだけは絶品…とあって、1個ずつが皿に乗っていた。ハム、チーズ、ヨーグルト、果物が豊富。何か判らないのは、リングオのすりおろしであつたらしい。



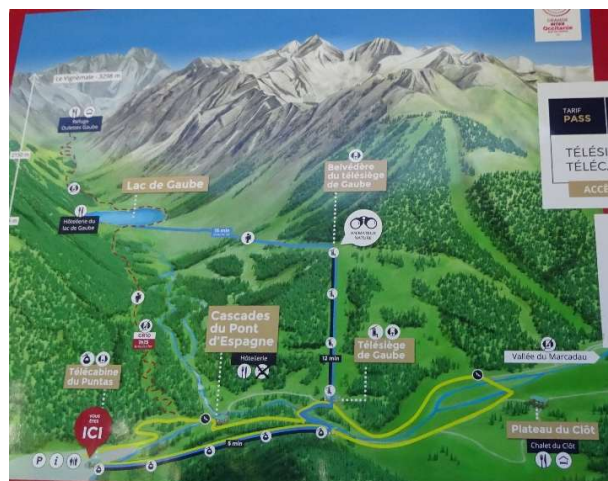
《朝食》

お弁当が配られる。中身はフランスパンにハムを挟んだのと、ツナペーストを挟んだ2個があり、オレンジとジャムとチョコバーと水だった。

今日は、このガヴァルニーから、一旦渓谷を引き返して、コーテレット村へ。そのポン・デ・エスパーニャ（スペイン橋）からのゴープ湖ハイキングが、足慣らし相当らしい。

ガイド本では、コーテレットは、天然温泉のあるスパリゾートで、冬は25のゲレンデと21基のリフトが動くスキー場となり、夏はハイキングのネットワークがある。スキー場設備を使えば、楽な行程にできるわけだ。

1時間のドライブが、渋滞になったのは、「バカンスに入ったからですかねえ」だったが、実際には羊の集団が塞いでいたらしい。



《絵地図》

ようやく着いて、ハンサムガイドと合流できた。ここから、ゴンドラとチェアリフトに乗り、それからハイキングスタートの予定だった。それが、なんと麓の村の電気ケーブルが断線し、ゴンドラが動かないのだという。



《ゴープ湖からの滝》

彼は、「大丈夫。替わりの素晴らしいコースに案内するから」と言っているようだ。葉の「アーチ型が美しい橋や穏やかな湖を眺めながらのゴープ湖ハイキング。エメラルドグリーンに輝く美しいゴープ湖を見る」は没になった。

啓子ちゃんは「やっぱり。なんか、起きる…と思っていた」と笑う。「そうだねえ。ドロミティーは、全部そうだったもんねえ」と、私も笑った。笑うしかないではないか！

ゴープ湖からの雪解の水を集めて、滝がしぶきをあげている。ここにかかるのが、有名なスペイン橋だ。



《スペイン橋》

青空と針葉樹と、鮮烈な水がきれいだ。そこで揺れている薄紫の菊は、日本では見ない種類だ。

橋から歩き始めると加藤TLから、「田中さん、舟田さんが前に」の指示。えっ？私達が高齢者？それとも、提出した既往歴の資料？配慮してもらえたら、安心だけど…。

そこから裏山状の森に入る。かかっていた絵地図の、東側の谷に入ってしまったわけだ。

本社からは「植物の説明を」の指示が出てはいたらしい。針葉樹の葉の説明や、アリ塚の説明、沼地の足跡で動物の種類の説明を受ける。このペースなら楽勝だ。



《蟻塚》

そこから戻り、川沿いに上がって、カフェで昼食となった。そのカフェも停電で営業しておらず、ただトイレは使ってもいいと言ってくれた。フランスパンのサンドは固く、何とか半分だけ食べる。ヘリが盛んにホバリングしながら、物資を運んでいた。

その原っぱを突っ切って、さらに上流に向かう。谷合を浅い川が流れて、のどか。高山の間に広がった上高地の雰囲気、ジギタリス、イワベンケイ、ハクサンチドリなどが咲き、牛ものんびり寝そべっている。

そのあたりで、花の名をさっと答えていたら、また「花博士」にはなってしまった。単に植物の区系分布において、北半球が「全北区」に入ってしまうから、日本と同じ植物があるだけの話だ。その環境をベストとして生きている植物を知るのは、その山の個性をより知ることのうち…と思うのだが、趣味や、物好きで片付けられるのがやや心外。まして写真を撮っている

と「遅い！」にされるのも、気に食わない。…が、現実的には「足が遅い！」が事実ではある。



《ジギタリス》

羊飼いの小屋があるあたりで前進をやめ、岸辺が高くなってきたあたりで、橋を渡り、今度は右岸を下りていく。あの羊集団が上がってきていた。イヌに追い立てられながら、日陰に集結しているようだ。その大きな犬が、抱き抱えられていった。

ガイド本には、パトゥー犬という、大型の白い家畜番犬と書いてある。オオカミやクマから家畜を守るために飼育されたとある。その使命のために容赦ないから、トレッカーはクマに遭遇した時のように、ゆっくり、落ち着いて後ずさりして離れること…とあった。



《パトゥー犬が先導する羊》

一通り説明は終わっているのだから、帰りは早い。私は、ムシトリスミレや他を見つけて、やはり遅くなった。後ろに回ってから見ると、皆さん、短パンや、タイツや、なかなかお洒落だった。真上からの太陽に、白く干上がった路、両脇は岩峰だ。

(この不可抗力といえる、ゴンドラ使用できず…は後日、3130 円の返金処理となった。)



《ハイキングからの帰り》

1 時間のドライブで、ガヴァルニー村に戻る。このバスの中で、もう一本のフランスパンサンドを食べた。バスに置いていった水と一緒にでないと、喉を通らず食べきれなかったからだ。

たっぷり余った夕食時間前に、町の散策に出してみた。まずは、ジェラートをゲット。店の地図を見ると、円形劇場のような壁の下は、みなスキー場になっている。生活するなら、夏も冬も観光地であることが、必要だ。夏はもっぱら避暑地のようで、冬用の暖房設備の方がしっかりついている。

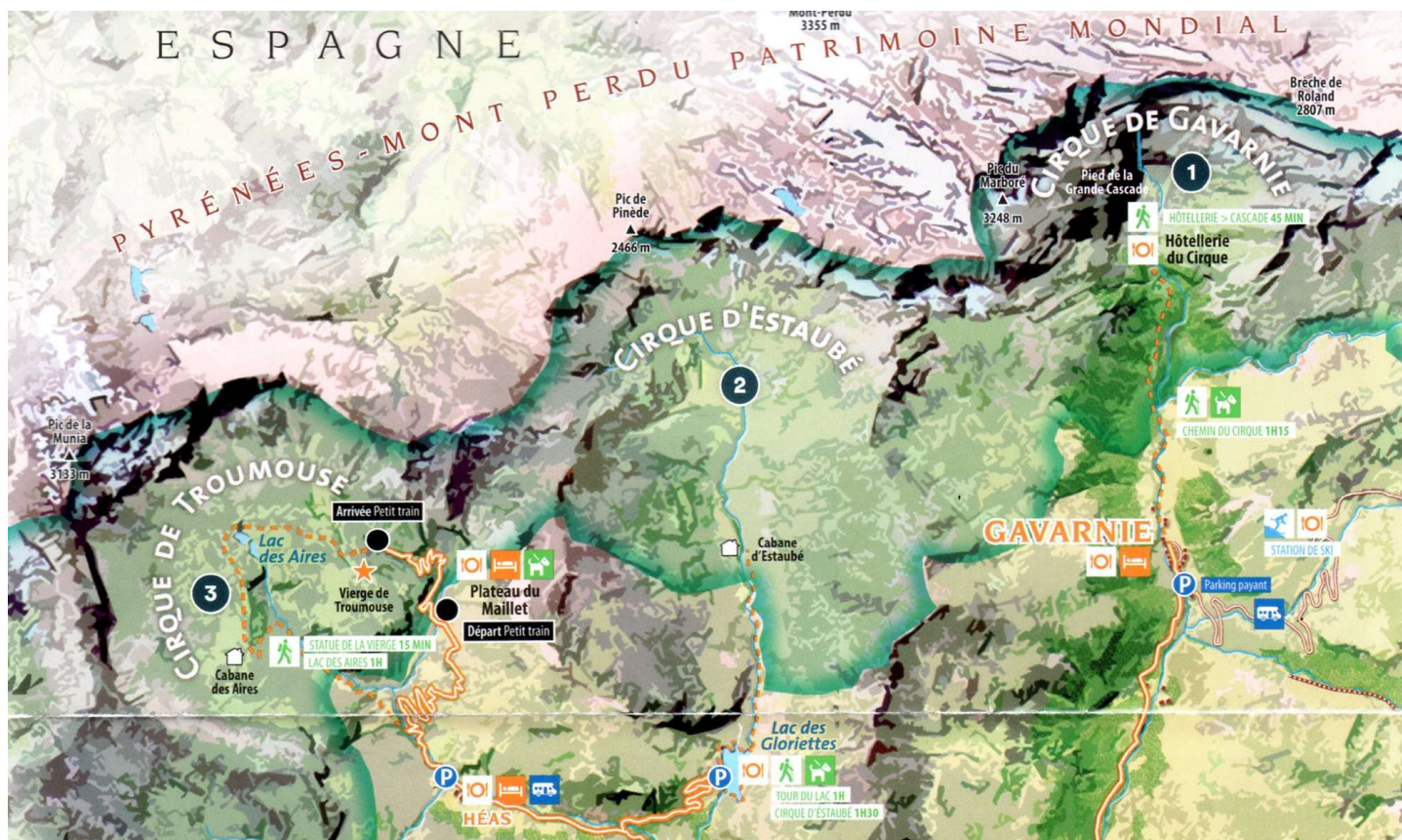
午後の円形劇場の上はやはり雲で覆われる。この光景のマグネットを買った。博物館や、インフォメーションは閉まっていた。

夕食の飲み物。晩酌はしていないからワイン 100% はきつい。サングリアという飲み物を頼んだ。赤ワインをジュースや炭酸水で割ったカクテルだという。このくらいが、飲みやすい。

◇6 月 25 日（木）渓谷ハイキング〜トルラ

ガヴァルニー大滝は、落差 422m の、ヨーロッパ大陸でもっとも高い滝とされる（三段に分かれているので、2 位との表記もある）。

円形劇場の谷の幅は約 800m、頂上の幅は約 3000m、岩壁の高さは 1500m。ヴィクトル・ユーゴーは「自然のコロッセオ」と称したらしい。圏谷は丁度村に向けて開いていて、歩くほどに、大岩壁がどんどん迫ってくる…になる。ツアーパンフレットの表紙はここなのだ。



今日もビッグサイズのお弁当。加藤 TL の「食べられなかったら置いて行っても」に、かなりの方が1本を抜いていた。ハイキングから戻ったらすぐバス移動になるから、チェックアウト後のトランクや小物をバーの方に移しておく。

昨日のハンサムガイドが、ホテル前に来ていた。ここからの出発なのだ。

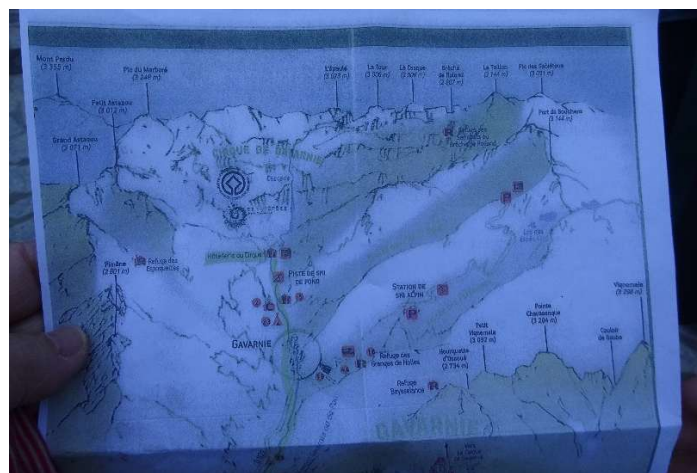
8:40 発。すぐに、右手の博物館側の道に上がっていく。その隣の教会の壁には、ホタテ貝のマークがあった。ここは、巡礼の道でもあって、協会は祈る場所であると同時に救護所でもあったのだ。



《ホタテ貝の巡礼マーク》

村より高くなった分、岩壁の上部がもう少し広がる。加藤 TL が「10 年前の資料ですけど」と、山並みの説明図を広げていた。上高地からの穂高連峰もそうだが、ぼこぼこピークだったら、どれがどれだか判らないものだ。知らない国だからどうでもいいよりは、知るための手がかりがほしい。1 回切りであろうと、聞いていれば、それをヒントに知識が増える可能性が出てくる。持っているんなら、コピーしてくれればいいのに…と思いつつ、写真に撮らせてもらった。

その山並みの切れ目はブレッシュ・ド・ローランといい、有名な国境越えの隙間で、きつい日帰りコースになるらしい。



《コピーした地図》

しばらくは木陰の道だ。ここでも、シラタマソウが出てきた。ガイド氏が摘まんで両手で挟み、「ポン！」の音を出す。そう、子供はたわいなく、植物で遊んだものだった。その彼が止まって三脚を構えたのは、岩の上でマーモットが日光浴をやっているからだ。それなりの大きさと判って覗かないと、望遠鏡の奥の保護色は、見にくいものだ。



《岩の上のマーモット》

ちょっと湿気のある木陰の道には、昨日とは違った花が展開する。アイリスに、固有種と言えるマルタゴン・リリーも出てきた。



《高台からのガヴァルニー溪谷》

ちょっとした高台から、圏谷が広く見えるようになった。昨日とはともかく、大景観をちゃんと見られるハイキングは嬉しい。そこから斜面を下りて、今度は川沿いのメイン路を歩く。そこには、石に囲まれた貴重な天然物エーデルワイスがあった。

そこから、斜面が急になる。たちまち遅れてしまう。その先にホテル・ドウ・シルクがあった。とりあえず、

ここが引き返し点なので、お昼とする。2 時間 10 分所要。



《エーデルワイス》

まだ歩き足りない人は、もう少し滝つぼ近くまで進むということだった。ほとんどの人が行ってしまった。やっぱり私達が最高齢なのかな？ざっと見たら、私達と、N 氏だけで、あと、葉の通りのそこで止めた加藤 TL が残っていた。そしてホテルのトイレを使わせてもらえるか？を聞いていた。私達は日よけ傘の下でテーブルに座り、コーヒーを注文して、堂々とランチを食べ、トイレも使った。このあと帰る行程もあるし、明日はもっときついコースなのだから、これで妥当だ。

大岩壁は陽にあぶられて、幾本もの滝が流れだしている。太古、ここを形成していた氷河はルルドまでを覆っていたそうだ。戻ってきた遠征隊に聞くと、近づきすぎた大滝は見上げることになったが、滝の音が迫力で、また、他にたくさんの滝があると判ったそうだ。



《折り返し地点》

11:45 下山にかかる。炎天下の戻りは、相応にきつい。標高差は 220m とあるけれど、登ってくる人達は

みな喘いでいて、やはり、最後の 30 分ほどの傾斜がきついのだった。

この 1 本道で、迷うことなく村へは帰られる。13 時にバス集合だけが決まりで、それまでは自由行動。早めに戻って店を覗いたり、冷たいものを飲んだりしようと、ゆっくりで戻ろうと OK になった。

私達はもちろん最後尾でよしとする。啓子ちゃんは、ストックに慣れたようだ。これ以上は急げないが、自分は、以前の歩く楽しさを思い出して、嬉しく歩いているとのこと。

午後のあぶられる時間になっても、まだまだ滝に向かって人たちがいる。それが足も肩もむきだしで、帽子もなしで、手ぶらだったりする。ここの人達は健全だ。ジムなんて当然になくて、自然の中を歩くのを楽しみにしている。



《村近くからのガヴァルニー溪谷》

写真で見る、小川の両脇を歩いている典型的な風景になって、ようやく村に戻る。「冷たいもの、冷たいもの」とアイスコーヒー€4.5 を注文し、氷もかみ砕いた。

これから 5 時間、160km を走って、国境を越え、スペインのトルラに向かうのだ。そのオルデサ溪谷は、ガヴァルニー圏谷の真裏にあたる位置関係なのだという。しかし、バスは大回りして、西側の峠を越えないと、そこへは行けないのだ。

13:20 発。ガヴァルニーの峡谷から抜け、左折すると古城があった。ピレネー山脈は、フランスとスペインの国境そのものだ。フランス側に GR10(45~60 日)、スペイン側には GR11 (6~8 週間) という、長大なト

レッキング路がある。スイスの登攀とも違う、巡礼のような歩き通す文化が、山伝いにもあるのだ。



《古城とガヴァルニー溪谷》

麓の田舎道を走りながら…には道の駅などない。デニートさんが、小さな町の郊外にある、広い駐車場のあるカフェに停めて、彼も休憩、私達も何人かは飲み物を注文して、代わりにトイレを使わせてもらうやり方だ。

今年 7 月 9 日には、ツール・ド・フランスがここを通るといふ。フランスは 6~8 月が長い夏休みだが、学力低下がひどく、休みを短くせねばの意見があるそう。バスの温度計が 38℃を示している、熱波が襲っているパリは 44℃だったらしい。平地より 9 度くらい低いとはいえ、そんな猛暑のハイキングをやっていたのだ。空調の向きを調節して風が当たるようにと言われる。

また休憩。一帯は、ヤギチーズが有名で、フロマージュ街道と呼ばれている。

16:30 とある村では、T 字路の先に普通車を駐車しており、VOLVO の大型バスはどうにも曲がりきれなかった。運転手は見つからず、結局、デニートさんはずっとバックして、警官には先導ならぬ後ろの露払いをしてもらって、隘路を抜け出し、これまた絶妙にクランクをやって、川沿いの土手路のようなのを使って曲がり切った。みんな拍手。ちなみに彼は、この博識と運転技術で、ピレネーへのご指名が多いそうだ。加藤 TL は、「そもそも、トラベルの語源はトラブルらしいですよ」と笑いを取った。

この村には、最奥の水力発電所がある。今では巨大なダムを建設ではなく、水の重さだけで発電できる技術をスイスが発明しているという。

ようやく国境超えの広いメイン道路へ出ると、ここも岩峰ぞろい。これも名があるであろうに、手がかりがない。ただ、国境のマーケットは品揃えが豊富なのと、そのトイレを使用と、聞いた。



《国境の看板》

17:30 1794m の峠の道路の両側にはここからスペイン(アラゴン州)、ここからフランスの大きな看板があるのみ。マーケットは夕暮れで店じまいにかかっていた。

アマ・ダブラムに似た岩峰は、ガイド本には、ピック・デュ・ミディ・ドソー2884m とあった。見えている山の名前もその人気も何も説明なしなのが、一般観光会社の、ハイキングというものかもしれなかった。



《ピック・デュ・ミディ・ドソー》

その巨峰が遠ざかっていくと、氷河湖ラヌサが広がっていった。さらに2時間で、標高1030mの、スペインの最も美しい村の一つとされるトルラ着。



《教会とモンタルエゴ山》

サン・サルバドル教会が建ち、後ろには、モンタルエゴ2845mの岩山が聳えている。古くから石造りの家が並ぶ、人気の避暑地らしい。大型バスゆえ、なおのこと、川沿いの駐車場にしか停められない。もう動けない気でいたが、高台のホテルまで、魔の石段が連なっていた。

19:55 ようやく部屋に入る。その15分後から夕食。€2.5の桃ジュースを頼む。飲んでも飲んでも、喉が渇く。ここで、「明日の夕食はここでもOK、ウサギのシチューが有名です。ただし予約が必要」を聞く。えっ何の話？あらためて葉を見たら明日の夕食には×がついていた。そうする根拠が判らないが、目抜き通りには石造りの店が軒を並べているから、好きなようにお楽しみください…が主旨らしい。ガイド本には、木製のバルコニーやフラワーボックスで飾られた伝統的な石造りの家々が立ち並ぶ、狭くて急な路地が迷路のように入り組んでおり、数軒の家族経営のレストランでは、ミガス(固くなったパンをニンニク、オリーブオイルで炒めベーコンなどを混ぜた料理)やラムのグリルといったボリューム満点の山の料理を提供しています…とある。

ただ、当方がその時点で聞いたのは、「夕食がない」と、「このレストラン利用でもOK。ウサギのシチュー」までだった。スケジュールの説明だけで、何が魅力などの説明を受けていない。

今のところ、わざわざ食べたい名物料理の当てがあるわけなし、言葉が通じるわけなし…。だったら非常食を片付けるとしよう（何でも食べられるし、食べてみたいのは、若さのうちかもしれない）。

本日は、ホワイトアスパラに、オリーブがたっぷり乗ったサラダ、骨付き鳥肉のシチュー、チョコプディングのメニュー。



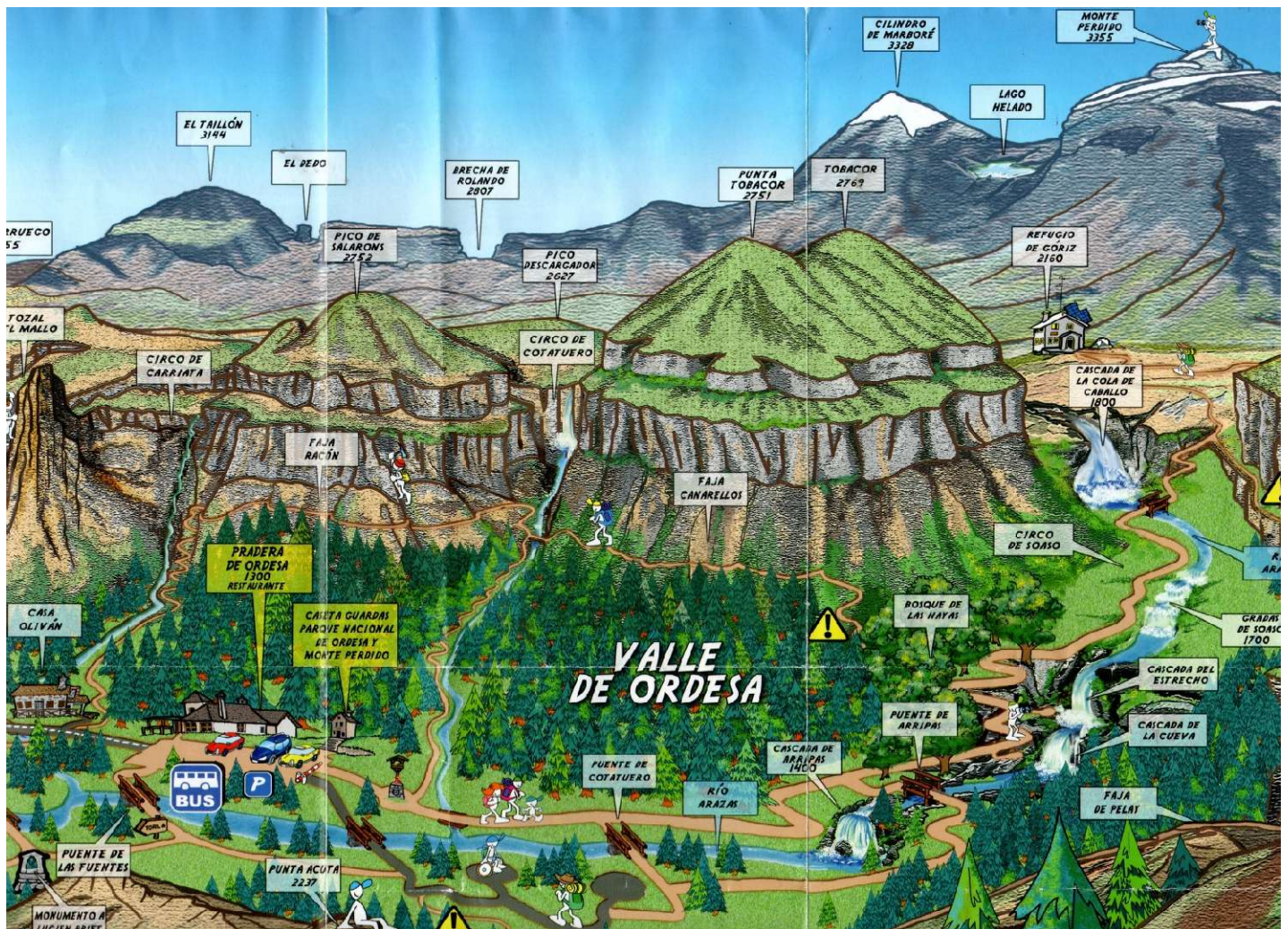
《石造りの街並み》

部屋の机のガラス板の下に、絵地図が挟んである。何しろ明日が最難関ということなのだ。14km を、ハイスピードで標高をあげられたら、同行は無理であろう。後半が陰しくなるなら、その手前で別れて橋を渡り、対岸を歩いて周回とせねばならない。その後、明日の朝食まではもう接触なしなのだ。

この地形図をしっかり覚えて、迷わず行動せねばならない。

ベテラン老女は、けっこう腹が立ったのだ。お好きにといっても、その参考になる地図も、店舗図の配布もなし。もう WiFi を使って現在地の検索をし、レストランも検索し、翻訳機能を使って注文をして下さい…が、普通なのか？

それが当たり前で、そうでない人は時代遅れの偏屈で、情報不足で不便を味わうのも仕方がないですねえ…の時代だということのか？



スマホが通じない事態はいくらでもおきるし、紙媒体を共有し、双方が確認してこそ、安全は担保される…。昔ならやっていたことを、飛ばしてしまうのは手抜きなのに、そこは「著作権が…」と逃げて、ツアー会社としての対処はなしで、あっさり自己責任にすり替えている…気に食わない！

◇6月26日（金）オルデサ国立公園トレッキング

下りでも強烈な石段…だが、すぐそばにトランクを引けるほどの坂がついていた。下のバス停から、20分おきくらいに、シャトルバスが出るのだ。

今日から二日間のガイドは、アルベルトさんと、ホルセさん。癖の強いスペイン語になったし、風貌も、その先入観で見れば、スペイン系だ。

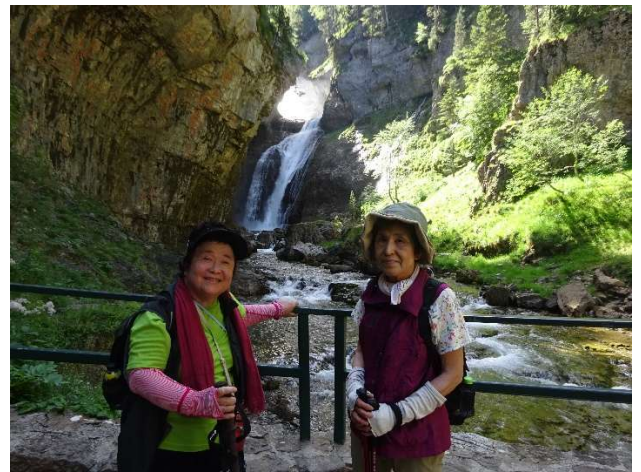


《朝のシャトルバスに乗る》

男性ではあのN氏が村散策を決めており、兵庫からの美人姉妹が、やはり途中離脱組とのことだった。

シャトルバスの終点、林の中の登山口 プラデラ・デ・オルデサでトイレを済ませる。最初はこの渓谷全体の説明。世界遺産と、ジオパークと、生物資源何とかの3つ共に指定されているのは、世界でも2か所しかなく、その貴重な1か所が、オルデサ渓谷なのだという。

正式には、オルデサ・イ・モンテ・ペルディド国立公園といい、スペインでは2番目に設立された国立公園だ。同時収容は最大1800人まで…の制限もしている。広大なU字型の峡谷は谷底からの断崖絶壁に囲まれ、谷の中央の流れに、いくつかの滝が形成されている。



《第2の滝》

葉には「グランドキャニオンのような絶壁の麓のブナ、ツゲ、モミ、松が茂る森林地帯を歩きます。途中川沿いを歩き、滝を見ることもできます。上り坂が終わり、草原地帯へ出ると、圏谷の奥にピレネーの名峰ペルディド山(3355m)の姿が見えてきます。」とある。

「グランドキャニオン」の比喻には笑ってしまう。ガスで何も見えない体験をしたからだ。そして、上から覗くのと、谷底から見上げるのも違うから、簡単に比喻として使えないな…と、見た経験からはそう言える。ともあれ、梢の上には意外な高さの岩壁がそそり立っているのである。



《両側に大岩壁》

看板を見ながらガイド氏の言うに、「トバコル山という岩山が遮っているため展望はきかず、麓の谷間歩きが続くこと。そこを我慢して回り込んだ草原のシルコ・デ・ソワツソで初めて、3355mのペルディド山が見え、階段状のソワツソ滝もある」…とのことだった。

そこまでは、やはり、植生の説明を…の指示があったのか、やたらと止まり説明が始まる。それに、ちゃんと、2枚のレジメを用意してくれていた。よく見る植物の学名・スペイン語名・日本名・カタカナ表記を対応表にしてくれてある。ただし、その日本名は、私が図鑑で目にしたこともないものばかり。

ちょっと使い物にならない。

「この樹はシラ…」「白樺？」「ノンノン、シラ…」「シラビソ！」で正解だった。白樺でもない、モミでもない…残るは…の程度だったが、また「花博士」にされた。知っているのだけを言っているにすぎないが、足の遅い言い訳には使っておこう。



《イワタバコのような花》

変わった花…イワタバコに似たのを見つけた。ガイド氏達はピンクのランも見つけていた。ポケット図鑑を持っていて、これのことだと見せてくれる。以前、新穂高の林道で見つけたキソエビネによく似ていた。また、クリスマスローズが各所にあって、実をつけていた。ただ、ずっと木陰の路傍のみだから、見かける花は少ない。



《ランの仲間》

バイクで走れそうな樹間の道に、いよいよ段差がついてきた。ゆっくり…はここまでだ。分岐はどこ？ちゃんと、滝への分かれ道があった。

離脱組が4名なので、橋まではホルセさんがついてきてくれることになった。途中の見所2本の滝に寄ってくれるという。そこは急傾斜になるため、ちゃんと見届けて…の用心だったようだ。

どんどんと下がって、まずは第一の滝 Cascada Del Estrecho 少し登り返して、さらに下りて Cascada De La Cueva があった。谷として開けた分、日が当たるから、フウロやクワガタがよく茂っていた。いよいよ橋が出てきたので、ホルセさんと握手をして別れる。

本隊の方は、この上の草原に上がって Gradas De Soaso 1700m を見してから、引き返しになるのだ。明日もまたハイキングなら、ここまでが妥当だ。

川を渡ったことで右岸の山との距離が開いた分、林の奥に大岩壁が聳えているのがよく見えた。

絵地図によると、橋1本をやり過ぎて、次で橋を渡ればシャトルバスの終点に着くはずだった。ただ、所用時間の方がわからない。

それで、1本目の橋を過ぎた所で、もう残り半分だけと見当がついたから、昼食をとることにした。同行の美人姉妹さん達は、まだ山の知識は少なく、妹さんはそれでも自然が好きだから、町で遊ぶよりは子供と立山に行く…を選んでいるという。



《振り返り見たトバコル山》

私は山歴では、百名山は済み、エヴェレスト街道も済んでいるけれど、老化とどう折り合っていくか？の段階にいる。バンバンに動けた時代の話をして、自慢げな昔話になると思う。女性はまして子育てや仕事

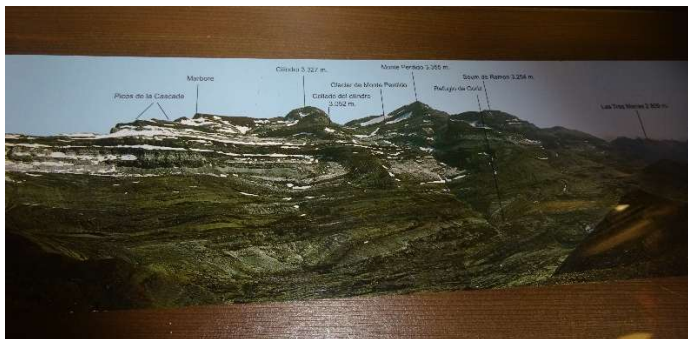
やのライフイベントとうまくかみ合えば、実現できる話だ。全身今の山装束を揃えて、「どこの山がよかったですかあ？」と問われても、後期高齢者は、かえって気軽に即答できない。

あたりさわりのない話をしながら歩く。振り返ると、視界を遮っていたトバコル山が大きく見えた。

そうやって無事終点に着き、13:15 のシャトルバスに乗り、トルラに戻った。

たかが電気ポットが部屋にはなくて、いちいちお湯を厨房にもらいに行かなくてはいけないのが、山間のホテルだ。コーヒーを入れて、残りのパンを始末する。

気疲れしていたので、その後はうとうと昼寝。



《写真のペルディド山》

昔、冒険家が講演で「行き先より、確実に戻る方が大事。何度も振り返って、帰り道の光景の方を覚えるようにしながら、進んでいる」と話していた。自己責任で生還するなら、そのつもりで現場の景色をチェックしつつ、進まねばならない。

昔、3回生になってPWのリーダーをやり、あまりに多くのことに気を配り、判断をしなければならないのに疲れ果てた。そのことでバテてしまった。付いていくだけの山登りは無責任で気楽だ。それなのに「〇〇も登れた」と過信する人は危ない。

また、上級生になり、後輩の育成に時間を使うか、退部して自身のキャリアに専念するか？…は、分かれ目になった。嵌まりすぎて留年になった人もいたが…。

たかがサークル活動でも、ワングルでは学業とは別の、かけがえのない経験をしたと思う。

明日の予定のメモが、ドア下に挟まれていた。

翌日、他の人に聞いたら、16:30 のバスで戻ってきたという。そこからはバラバラ…。ホテルのウサギシチューを食べた人もいるが、街並みにコンビニという類はなかったらしい。

石畳の伝統的な街並みが絵本の世界に迷い込んだようとか、短いメインストリートで買い物を楽しめるようであったかは知らない。それ以前に、もう半端な土産はいらないし、残してばかりいる異国の料理をわざわざ食べに行きたくもない、自分がいた。

私たちの方は、さらにお湯を調達して、尾西の五目飯と、スープを夕食にした。

◇6月27日(土) ベナスケ

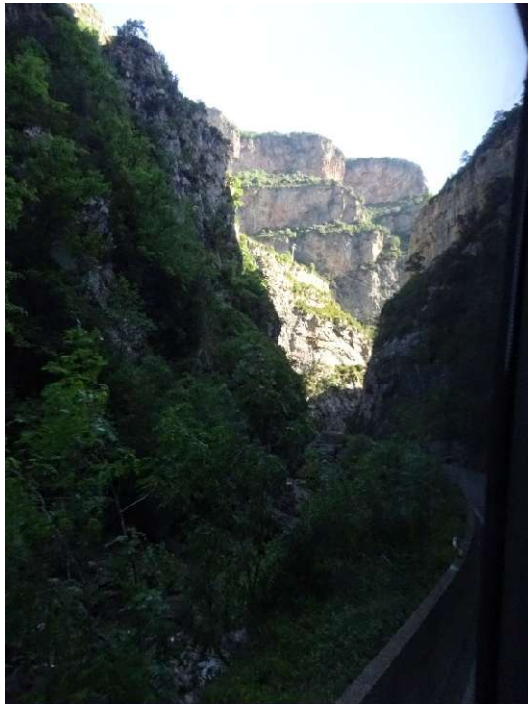
朝5時、大音響が響いた。昨日から「これ何？」になった、ホテル前の長テントは、今朝のこのイベントのためだったらしい。ロック音楽の響く中、人々がどんどん集まり、6時にそのトレラン集団が出発していった。これだけの人達が、どう昨日のトルラの町にいたのか？一昨日の晩、外がうるさかったのはたしかだが、夕食の×が、なおのことそのせいだったのか？それも判らない。



《朝食》

トランクは、来た時と同様、別にカートで下へ運んでくれるという。昨日丸一日お休みだったデニートさんと再会。8時発。

ここから2時間半走り、ポセッツ・マラデタ自然公園へ。1回の休憩を挟み、途中、狭くて深い谷の間を走った。



《深い峡谷を走る》

私はせっかく現地に来ているのだから、こんな場所の説明をしてほしい。激しい造山運動がここで起こって、フランスとスペインを分けたし、攻防の地になった歴史もあるは筈なのだから。

英語の他に、フランス語とスペイン語が聞き分けられて、旅を遂行していけるのは有能であるし、それこそが添乗員の本分であろうけれど…。普通に日本語で説明があっても、それが無理なら、それらを書いた資料を配布でもいいはず…。このあたりが抜けてしまっている。そんな作業への対価は出ないし、TLは会社都合であちこち使い回されていて、本来の責任範囲でもない…となれば、どうしようもないが…。

あとで買ったガイド本には…

人里離れたエスコンド渓谷に位置し、アラゴンとフランスの間の玄関口となっているベナスケは、冬の寒い時期には絵のように美しい冬のワンダーランドに変わり、頑丈な石造りのコンドミニアムのロマンチックなアルプスの建築様式を堪能できます。

ベナスケ渓谷は登山家にとっての楽園であり、ピレネー山脈最高峰のアネト山(3404m)へのアクセス地点となっているため、本格的なトレッキングや登山の拠点となっています…とある。



《ベナスケ村》

そのベナスケ村は「宿泊予定ホテルはあれです」と聞いて、素通り。トレッキングをパスするN氏だけはここで下車していった。

今日は、最高峰アネト山の見える地までを5時間のトレッキングだ。昨日の二人のガイドが、スタート地点で待っているとのこと。



《途中の絶景》

その二人は、ベナスケ村から40分の、車道の別れ道のある所で待っていた。なんと、この猛暑で山火事警報が出て、ハイキング路は一部閉鎖、シャトルバスも運休になったのだという。

啓子ちゃんと私は「またか…」にならざるをえなかった。ドロミティーでは遅い雪解けでパアーになり、今度は猛暑でパアー。生計が狂ったわけではないが、大枚はたいて出かけてきておいて、気候変動の被害を受けているのだった。



《ハイキングスタート地点》

情報を補った結果から説明すると…。

仮に、ここから斜め下に下がった場所にあるインフォメーションをP1とする。P2に大駐車場があり、バイオトイレがあり、多くのハイキング路の出発点にもなっている。

私達も、このP2から、アネト山の展望地であるアイグアリュッツ滝まで歩いて折り返し、シャトルバス

終点であるP3で乗車してP2へ戻り、大型バスに乗り換える…が、本来の予定だったのだ。

今回の代替案は、ガイドさんの車をP1に置いて同乗してもらい、大型バスはP2まで私達を運ぶ。そこから手前の湿原を大回りして戻り、前方をカットした分は、さらには山中を歩いてP1に戻る分を追加することで、計5時間にする。そしてP1で待機している大型バスに乗って帰る…となったのだ。

ただ、手元に資料なしの私達の方は、「代わりの案で動きます」だけを聞かされた。

さて、スタンバイしようにも、P2のバイオトイレの片方が使えなくて、女性陣が時間を食う。

11時、東方向へと牧草地に入った。今日は若いホルセさんが先導する。大晴天で、広々の谷は気持ちがいい。不思議な建物…が、ホスピタル・デ・ベナスケだった。加藤 TL の言うに、阪急が、このホテルに宿泊してから、トレッキングに出たこともあったという。



ホテル営業もすれば、保養所、救護所も兼ねている。ちなみに稜線に上がった所の山小屋はどれも救護所を兼ねていて、小屋番不在の時も、備品を使ってもいいことになっている。巡礼という山歩きスタイルがあるからだ。

牛も多い。両脇が山で、間が平坦で小川（エセラ川）が流れていてくれたら、そこは最高の放牧地だ。いかにもものつたりと牛たちが草を食み、私達も刺激せず…で通り抜けた。



《最高の放牧地》

ワタスゲ、ナデシコの仲間、ハクサンチドリ…やはり、6月末が花のシーズンのようだ。登り坂になり乾燥してきたぶん、ピレネーアザミ（ブルーシャドウ）が増え、アルペンローゼの花木が混じりだした。リンドウが薬玉状に咲いているのがあって「リンドウの仲間ですね」までしか答えられなかったが、アルベルトさんは、それが載っている図鑑を見せてくれた。白のぼさぼさの花をもつものはずいぶんと株が多かったけれど、見たことがない種だ。徐々に右に曲がり、その上にまた湿地帯があった。



《ピレネー・アザミ》

どうやら、この圏谷には、かつて氷河湖がいくつもあって、それが埋まった湿原が次々にあつての絶景になっているらしかった。

後ろ側の山の、上部が見えだし、鞍部の氷河が見えるようになった。もっと広い湿地を大回りして、その最奥で、昼食休憩になる。



《ピレネーの絶景》

湿原はミヤマガラシのような黄色で覆われ、ゆるやかな流れがそこで広がっている。絶景だ。ここで13時。その先に入山規制がかかっていたのだろう。

日陰の草原に座りスパニッシュオムレツをはさんだサンドイッチを食べる、ユキワリソウの仲間や、アルピナアネモネの綿毛も見つけた。



《ユキワリソウ》

そこからは、シャトルバス用の車道に出る。あとはひたすらP2へ戻る。湿原のこちら側はやや池になっていて、魚釣りをやっている人達がいた。

周囲の車道脇にはヤグルマギク、トリコロールスミレなど、路肩を好む別の花も出てきた。ただ、車道になってのハイスピードをやられると、膝にガンガン響く感じになる。

あのホスピタルの横に出てきた。左の崖に別の黄色が混じってきた。黄色のヒナゲシにタマキンバイの花園ができています。



《ホスピタル横のお花畑》

ようやく P2 に戻ったら、大型バスは待っていないかった。この段階では、コース変更の内容を全く聞いていなかったから、がっくりきた。さらに、歩き続け。ここで、バイオトイレの列での最後だった私は、待っていた啓子ちゃんと、追いかけながら歩くことになった。だから、ここのバス停状のインフォメーションに地図があったことを聞いてはいない。

皆が待っていてくれたのは、P1 へのショートカットのための山道に入る所。日陰に入れた替わり、かなりの急坂だった。途中で、生きのいいマルタゴン・リリーを見られた。



《マルタゴン・リリー》

屋根らしきが出てきて、それが P1 のインフォメーションセンターだった。暑くて、とにかく、冷たい飲み物を注文したい。ゲットして、風の通る席に落ち着く。

デニートさんと連絡がついたが、大型バスはメイン車道からこちらへは入ってこれないのだという。

300mほどの道のりだが、もう歩く気力がなく、アルベルトさんのザック運びの車に乗せてもらう。彼は 2 往復して、疲れた女性陣をバスまで運んでくれた。これで、二人のガイドさんとはお別れになった。



《モダンなホテル》

やっと、ベラスケのモダンなホテル、「1 ランク上」と称しているソモスホテルアネトに帰着いた。8 時から夕食。それが、チョイスメニューだという。

まず、エントランス横のラウンジで飲み物をゲットする。これが、「会社からのサービスの 1 杯」に相当らしい。元々の旅行代金を払っているのに、どうして「サービス」になるのか？毎度わからない。



《キントレ・ベラーノ》

キントレ・ベラーノ（例のサングリア）を頼んだ。大きなワイングラスに 2 本のストローをさして出てき

た。2本のストローとは？2人で飲む？太いストローの代わり？それをここで飲み切らねばならないのか？こんなのを持ったまま地下階のレストランまで移動するのか？不明。

次には、前菜を5種から、メインを5種から選び、デザートは中央テーブルからとり放題…というシステムだった。名前だけで料理が判る…というものでもない。何がチョイスか？といえ、2皿を軽めに組むか、がっちり目に組むかぐらいのことだったようだ。私は本場スペインで食べてみるかと、アーティーチョークサラダと、白身魚のムール貝添えを頼んだ。

わざわざ別皿に入ったフランスパン？ガーリックで表面を撫でてから、トマトをこすりつけて…をスタッフが実演した。この素材で、それがどうした！の次元だった。

それぞれ運ばれてきたが…。皆が、つまりどんな料理だったのだろう？と、皿を見比べているのが、おかしかった。私は、元々あざみのつぼみだし、次もムール貝を食したくらいでおしまい。そもそもが、陽にあぶられ続けと蓄積疲労で、バテ気味…食欲がなかったのだ。

建物は外側に明かり取り窓のようなのが見えたが、私たちの部屋も屋根が斜めになっていて、1か所が吹き抜け窓になっていた。広い洗面所に洗面ボールが2つあり、左端にシャワーとトイレ、右端に2人用かも？の大きなバスタブ…使い方不明。実際には、シャワーの側の固定されたシャンプーが出てこないで、ちゃんと出てきた方の大きなバスタブの中に立って、シャワー使いをする…しかやれなかった。クローゼットが、戸口からは最奥の暗がりであって、動線としてはおかしい。



《不思議な水回り》

わざわざ「1ランク上の」表記だったが、独りよがりになんぞ不自然な造りにしてあり、使い勝手の悪い仕様だった。このホテルの評価が判らない私は、「現代美術は、さっぱりわかりません！」と答えるしかない。居心地がよくて、客への心遣いがそれとなく感じられて、寛げるのがいいホテルでしょ？〈愚痴っぽくなるのは、老化か？〉

◇6月28日（日） ラ・コマ アンドラ

朝のフロントで、地図の載ったパンフはないかと物色するも、スキーやバイクのアクティビティばかり。一方ハイキングコースの方は、多数がファイルされていた。どうやらこれらしい…を見つけ、また、地図を広げていた人に声をかけて、とりあえず確定できた。その地図を撮影して、検索の手掛かりをゲットした。

朝食は、昨日のデザートブースに、チーズやハムが豊富にあった。アルミホイルに包んだランチを受け取る。

ここからアンドラへ向かう。「当社通常ツアーでは訪れることの少ないアンドラ」は、これもツアーの売りらしいが、聞いたことがない国だ。

加藤 TL の簡単な説明を聞くと、そのためにパスポートの用意がいるのは普通としても、税金を安くして経済活性をさせている要領のいい国…としか思えない。



《この大型バスで移動》

「地球の歩き方」のフランスにも、スペインにも載るはずがない国…でもある。後で買ったピレネーガイド本だけが資料だ。

アンドラは、大陸で最も標高の高い首都がある、小さな公国だ。フランス大統領とウルヘル（スペイン）司教が共同統治する共同公国であり、中世の封建制度が今も存続している。それは、ピレネー山脈が自然の袋小路を作り出したからで、列強にとってアクセスが困難で戦略的に重要性が低かったために、何世紀にもわたって、主権国家として存続できた。EU やシェンゲン圏への加盟を拒否し、強い独立性を貫いている一方で、貿易、観光、交通の面では二つの大国に完全に依存している。それは国境管理が依然として実施されていることを意味し、パスポート携帯が必須となる一方で、免税ショッピングが旅行者をひきつけているのだ。金沢市ぐらいの広さに8万人が住んでいるそうだ。



《アンドラは都会》

延々4時間30分走る。だから、やはり、ドライバー休憩兼トイレ休憩が挟まる。カフェでのカフェオレが、スペイン語では、カフェコンレチェになる。街中に停めて、30分休憩という場面もあった。

今晚の夕食がフリーになり、また、明日は11時出発までは自由行動となっているため（ハイキングのこなし方ばかりに留意していた当方には、この長い空白時間が初耳のような感）、加藤TLは「今のうちに明日の予定の説明をしておきます」という。

集合の遅い明日はのんびりのようであり、実は夕方にはバルセロナから帰国なのだ。その前にモンジュイックの丘からイエスの塔が完成したサグラダファミリアを眺めるが、ひたすらバルセロナ空港へ走る半日になる。

であれば、今晚のうちに帰国用の荷物の仕分けをせねばならないし、昼食なしなら、朝食を遅めにたつぷ

り食べ菓子パンを隠し持つ…くらいをやらねばならない。

勘ぐるに、最後あたりで食事なしが続くのは、高い食事代を加算すると、円安のために、旅費がもっと高くなってしまふからか？

それとも、とびきりのディナーを張り込みたい人や、本場バルを梯子したい人や、その部分で非常食を使い節約したいという人や、バラバラの要望を叶えるためか？

慎重を要する帰国段階をずっとフリー状態にして、善処ができるのかな？

私はすぐメモしているけれど、みなさんはそうでもない。後で配られるであろうメモ一枚で、卒なく行動していくのか？これが、年寄りの心配性ってやつか？はてはて？

山のはざまに突然、ビル群が出現した。なおかつ、工事中のクレーンが何本も建っている。山中での異常な風景の一角…それがアンドラの首都 アンドラ・ラ・ベリャだった。一瞥にすぎないが、免税天国にして、本来ひなびた山村程度になるぐらいの地に、贅沢消費を呼び込んでいるように見えた。

そこを通過し、さらに上がって行く。デニートさんは休憩の規則に引っ掛からないよう、必死に走ってくれたらしい。



《谷合にあるビル群》

ガイド本には「グランヴァリラはアンドラのスキーの至宝であり、ピレネー山脈最大のスキーリゾートで

す。210km を越える滑走可能エリアと 143 本のコースを誇り、あらゆるレベルのスキーヤーにとって広大な遊び場を提供します」の文章がある。あのビルの町を見ただけではわからない背景だ。

どうやら、スイスやチロルと同じだ。まずスキーのための設備がありきなのだ。夏場はその設備を利用した避暑地になる。高所に上がり、展望と高山植物を楽しむハイキングやトレッキングをやれる。

それは、「絶景と花のフラワーハイキング」として、日本では、中高年向きメニューとしての募集が掛かる…ということなのだ。



《長大なゴンドラ》

ソルティニー渓谷（ヴァル・デ・ソルティニー）に入ると、長大なゴンドラが見えた。

ゴンドラは尾根を越えて、今度は下がり、広いゲレンデの中央で反転していった。

ここで、ガイドのパスカルさん、ラリーさんに出会う。時刻は 12 時を過ぎていたので、ランチを済ませてから 13 時に再集合となった。生ハム入りのフランスパンにかじりつく。標高が高い分、丈の低い高山植物ばかりだ。



《アルペンローゼ》

本来はこの、ラ・コマから湖巡りをする 2 時間のハイキング中級だった。しかし、昨日は山火事警報で標高を上げていない。ガイドさんたちは、それなら、このリフトで稜線まで上がって、展望を楽しむ方がずっといい…と提言したらしい。だれも異論はなかった。

2 人乗りリフトで、わずかなことで、アルペンローゼの咲く斜面を、ぐんぐん上がっていった。そこにはもう、フランスとアンドラの国境を示す標識が立っていた。右の尾根伝いには、リング状の展望台が見えた。私達二人と N 氏が残ри、あとは賑やかにその展望台へ上がっていった。



《フランスとアンドラの国境》

急げ者は、360 度の展望といっても、わからない山並みが広がっているだけなら、そう特別感はないであろうと判断。ゆっくり花探しをやり、記念写真を撮り、下りてきた人達と一緒にリフトで下った。



《センペルビウム・モンタヌム》

これだけではフラワーハイキングにならない…と、車道脇の湿原の散策がおまけになる。まず車道をその

まま下って行って、左へ湿原に下りて、登り返しながら散策。チングルマの実に似たの（モンタヌム・ダイコンソウ）や、ミヤマリンドウや、ベンケイソウの仲間（センペルビブム・モンタヌム）や、シオガマグク、リンドウ（ゲンチアン）…花を探す時間となれば、次々と発見できた。マーマットの巣穴も見えた。

満足してゴンドラへ。さらにバスで、アンドラ・ラ・ベリャへ。

これまた「1ランク上」表記のホテル、グランドプラザは三角柱型の変った建物だった。フロントにはまさに現代美術の、アルファベットの金属片で作られた人体があった。エレベーターも、バラバラに3つの隅に設置してあるのだった。



《フロントのオブジェ》

フロントに飾られたリングをゲットし、またまた、非常食のカップラーメンを夕食とした。そう、ラスベガスも、カップラーメンですませたのだった。そうやって嵩張る非常食が消え、買い物をしなかったの、トランクは隙間ばかりになった。

◇6月29日（月）～バルセロナ～イスタンブール

目の前でも建築中だった。不況がはびこりつつあって、建築費高騰が騒がれる時代に、なんでこんな山奥へ来て、ビルだらけになるのか？

1回きりのブッフェ会場には、フルーツがたっぷり、ヨーグルト系と、生ハムとマスの燻製の類が多かった。人気はサーモンの食パンのサンドイッチで、固いフランスパンのサンドには皆閉口していたらしかった。飲

み物をお替りして粘っても、そうそう食いだめはできない。



《スペインらしい朝食》

昨日、フロントから市街図はもらえたが、各部屋に一枚の支給だった。「ホテルの場所はここで」のマーキングをしてもらったのだが、私は、こんなビル街の散策をする気などさらさらしない。啓子ちゃんが散歩に出るなら、一人でにしてもらった。

反省するに、ピレネー紀行の本文に必要な知識なら、見ておきたいが、街中の雑事レベルは見たくもなかった。玉龍山紀行を仕上げていないし、この後に焼尻・天売が続くし…二度とこれない場所であろうと、ヒマ潰しの判断になってしまった。

それに、出国の手荷物検査がある。荷物はトランクと、ザックと、ショルダーバッグの3つになる。バッテリーやスマホやヘッドランプ、予備のカメラ、eチケット、日本円、SUICA、深夜バスのコピー、返却するイヤホンガイド…それらを今一度確認して、出しやすい場所に…の方がずっと大事だったからだ。

啓子ちゃんが戻ってきた。「24時間前からはターキッシュ航空のHPから入って、座席の無料予約ができるというので、やってみる」という。それより先だと7000円が必要になるそうで、せっかく頑張ったのに、わずかの時間差で、有料予約になってしまった人もいたようだ。

予約は成功。啓子ちゃんすごい！私…仕事を止めたし、やっぱりスマホ習得をすべきなのだろう…を思っている。世の中は、サギやフェイクニュースに関わらず、大きくスマホ利用に傾いている。この流れに、なじむしかないのだ。

フロントに降りた時には、皆さんが、座席の予約に
がやがややっていた。

ここからは、東へ、バルセロナへ、ひたすら走る。
約3時間半。どんどん賑やかになっていく。

あのサグラダ・ファミリアのイエスの塔が完成し、
2026年6月10日に完成の祝福・完成記念式典が行わ
れた。アントニ・ガウディ没後100年にあたる。それ
でバルセロナはますます人気になって、ホテルも飛行
機の座席もとれないという。そんな人気のバルセロナ
便が増便されないのは、首都マドリッド便が閑散とし
てしまう怖れかららしい。



《モン・セラット》

右に奇岩が見えてきた。バルセロナ近郊で有名な、
モン・セラットだ。「のこぎり山」の異名通りの山だ。
バルセロナ観光の際には寄るツアーもあるという。

バルセロナの街中に入る。モンジュイックの丘がど
れだけ混雑するか？だったが、スムーズに駐車場に入
れた。高台の聖堂の石段から一望の街の右に、小さく
サグラダ・ファミリアが見えていた。昔さっちゃんも
含めた3人で来てから、丸10年がたっているのだっ
た…。



《サグラダ・ファミリア》

この丘自体は、墓地なのだという。加藤TLが、「昔
は今より20万円ほどは安かったです。これ以上高くな
ったら…皆さんのようなお金持ちしか海外旅行に出
られなくなってしまうですね」と、嘆くように言
った。

お金持ちかは？「行けるうちに」で思い切っている
贅沢で、最後かも？と思う散財だ。

ちょっと頑張れば行けて、他の国や人をいろいろあ
るもんだと眺めて…それこそが平和につながること
だろう。

国や人々の経済格差が露骨に出る「贅沢」になっ
てしまったら、それは、旅の魅力が消えていくことで、
決して歓迎できることではない。

そこから空港は近かった。寄り付いた場所には、ス
ポーツクラブの少女たちが下車していた。鮮やかな青
と黄色のユニフォームに、赤のザック。まさにスペイ
ンの配色だった。



《スペインの配色》

◇その後

6月30日 羽田19:00着。夜行バスで翌朝7時
に金沢駅着。過密な退職記念旅が、これで無事終わっ
た…ではないのだが…。

無事ピレネーを消化できたので、ワングルOBの白
山企画への正式申し込みをする。

7月4日 写真を100枚選び、加藤先輩に送信する。
家族はともかく、他へは写真を添付しての帰国報告…
自分にすればそれが「お土産」相当なのだ。

5日配信。地図のなかった今回は、時系列の映像でざっと記憶の整理をし、ピレネーに関してはしばし凍結。玉龍雪山後の課題とする。

9日 時差ボケと蓄積疲労を爆睡で解消しつつ、まず、玉龍雪山紀行の方の草稿を仕上げた。天候悪く、人物ウォッチングに大傾きしてしまった。ただ、中国辺境の「今」を見た…とは思う。

12～15日 北観の焼尻島、天売島。パンフの事前送付があったのには安心。バードウォッチングなら、のんびり双眼鏡観察かと思ったら、「船に遅れる。歩け、歩け」のスピードハイキングだった。80万羽のウトウの帰巣には圧倒されたが、翌日の雨と濃霧の中をハイキング(今回もトレーニング?)の方はパスし、3,000円のバス観光にした。



《ウトウの帰巣》

16日 島の写真を選んで、加工を依頼。17日には受け取り、配信。某機関誌8月号候補の北岳の草稿をまとめ、写真を選定。

19日 息子が来て写真を嵌めて仕上げてくれ、玉龍雪山紀行がようやく完成、配信する。

20日 北岳の機関誌原稿と写真を送信。

22日 啓子ちゃんが泊まりに来る。装備点検。

23～25日 金大ワングル OB 関係 13名での白山。久しぶりの小屋泊り荷物に、冷凍スイカや素麺を加えたら、重くて重くて牛歩。遅れて出発の懐かしい顔ぶれにも次から次と抜かれてしまった。でも最高の天気、かつ、百花繚乱そのものだった。

きつい標高差に老女二人の足は遅くなるばかり…で、御前峰にはぎりぎり、雲が視界を遮る前に到着できた。慎重にお池巡りに下りて紺屋ヶ池で、カップラーメン。室堂に戻った時には南竜の夕食時間には間に合わないとなって、遅れるとの電話をいれる(後で聞いたら、予定通り動いたのは私達二人だけで、皆、端折って、のたり時間を楽しんだらしかった)。翌日は、同乗車単位での下山となったが、啓子ちゃんの足がすくみ、サポートしてもらってゆっくりの結果、2時間のコースを5時間半かかっていた下山になってしまった。仲間には大感謝だ。

翌日からは雷鳴が響いて、雨ばかり。3日間の好天続きは、まさに幸運だった。



《白山の頂上》

7月27日 白山の写真を選んで加工を依頼

7月28日 白山の写真を配信。

16時27分、令和8年熊本地震勃発。

能登地震の光景が再現されてしまった。2年半たったからといって、予防できたり免れたりできるものではない天災。

そして、天災でもないのに、瓦礫の山を作って平気な大国の指導者達…鬱っぽくなる。

なお、フランスもスペインも、大規模な山火事がニュースになっている。

30日、兄死去のメールが入る。

8月1日に一日葬。あとは兄の子供達が片付ければいいこと…。これで、いよいよあと1箱残っている実家の遺物を、処分してしまおうと思った。それが私にとっての最終実家仕舞い。

2日 篠笛師匠の退院は遅れたが、「稽古再開」の電話をいただいた。落ち着いた口調に、この方も、とりあえず「日にち葉」で妻の逝去を乗り切った…を窺い知った。

その日、長男に「父親の傘寿の祝いの音頭をとって」と依頼。夫が生きているうちに、子や孫に囲まれて…を、やっておこうと考えたからだ。

ばたばたと起きたいくつもの別れを目にして、「今、やるべきこと」はそれと思った。

◇エピローグ

林真理子が『80代になるとたいがいボケるか死ぬ。70代は神様から与えられた特別な時間』というだらだらタイトルの本を書き、販売部数を伸ばしている。身も蓋もなく、その通り。私も「やれることをやる」75歳を、過激に実行したのだ。

天売島で、長い付き合いになる北観の塚本添乗員が、いよいよ「来る3月での退職を決めた」と言った。馴染客は、「それなら、外野アドバイザーで指南を」と切望したが、「白タク営業と同様で、やれないこと」と言う。

それ以上に、仕事で日本百名山を三巡もした彼にも、やりたいことがあるのだ。今維持できている体力で、我慢し続けてきたエヴェレスト街道や世界の名峰に登る夢を叶えたいのだ。

わかります！それらを優先できた、彼より5歳上の私の方は、ずっと、山遊びの離れ時に逡巡してきました。模索したあげくに、今なんだ！と思える、「決断できるとき」があると思います。

8月10日のBS4K プレミアムカフェで、2年前に行ったチロルが舞台の「エーデルワイスを探す旅」のアーカイブを見た。2000年の取材だから、斉藤由貴は34歳で若い。足のすくみで、2時間半のコースに6時間かかり、以降を断念…のシーンがあった。周囲をベテランで固めても、無理は無理。初心者、高齢者は、無事下山できたら御の字と、こんなシーンで、白山を振り返った。

暇になったお蔭で、プレミアムカフェを視聴できるようになった。2000年頃からの自然番組が多いのは、ハイビジョンという性能を手にしたうえで、企画、取材、編集にも時間をかけられた良き時代だった…といえそう

そして、人が真摯に「映像」という手段で、伝えたい、残したいと情熱を傾けた時代は、終わったのかもしれない。

AIが何でもやってのける。しゃあしゃあと、フェイクを流してしたり顔(?)の不幸な時代になってしまった。「情報」はまず疑い、距離を開けるべきであって、単純にときめく時代ではなくなった。

映像と言えば、『映像の世紀』の初公開映像で、隠蔽されてきた「真実」を胸塞がりつつ見ている。戦後80年が過ぎ、ここまでヒトの愚かが分析されても、悲惨な記憶は薄れ、平和の希求と我慢も忘れ、ヒトは紛争をやめない。そして止められない。

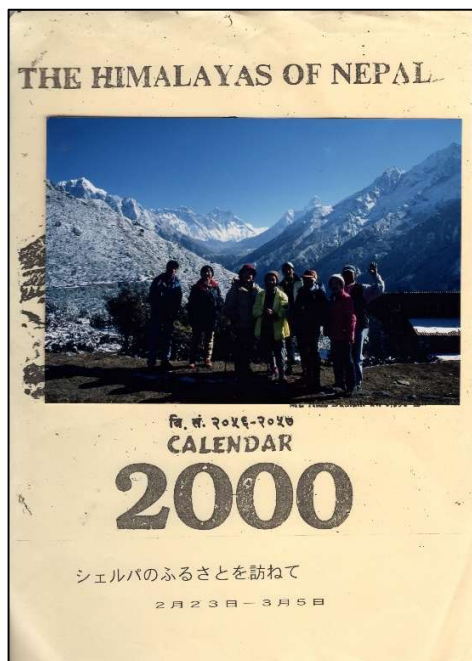
かつてヒトラーは、映像がプロパガンダに有用と、すぐ気づいたという。それに輪をかけて、「誰もが発信できる」時代になった、情報技術は、脅しをかけ、煽り、翻弄するものになった…そのやりきれなさ。

閑話休題。

その2000年は私にとっても海外トレッキングのスタートだった。

それには、前年の兄嫁の死去と母の主婦返り咲きが関係している。自分は育児卒業まで待っていられなかった。「シェルパのふるさとに博物館建設」プロジェクト

トの下見ツアーに、千載一遇の機会と飛びついた。エヴェレストを見たい！と渴望したからだ。



《2000年の紀行》

念願は叶ったが、もっと近くで見たい…の夢が残った。カラパタールからの大展望のポスターを臥薪嘗胆とばかりに、机の前に貼る。

2005年の、末子が大学入学までの雌伏の5年は、「石川県の山」など、地元の山の取材の活動で過ごした。

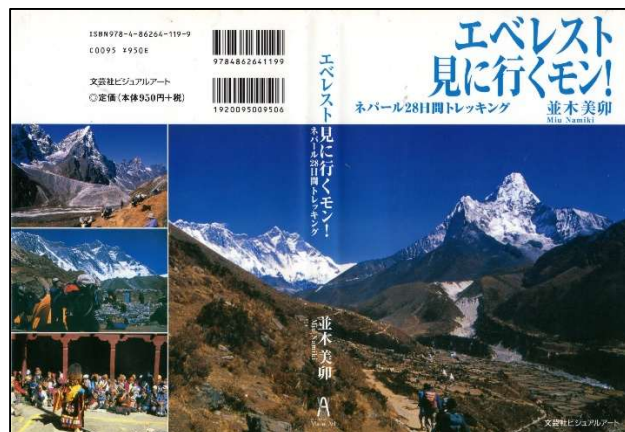


《地元の山の取材活動》

その間に、北観の百名山ツアーが始まり、山岳会の分裂騒動もおきていた。

丁度、育児卒業と、山岳会の縛りがなくなったことが重なり、私は一気に、百名山ツアーにも、海外トレッキングにも、出かけられるようになったのだった。

また、自費出版の誘いに乗り、エヴェレスト紀行を上梓したこともあった。

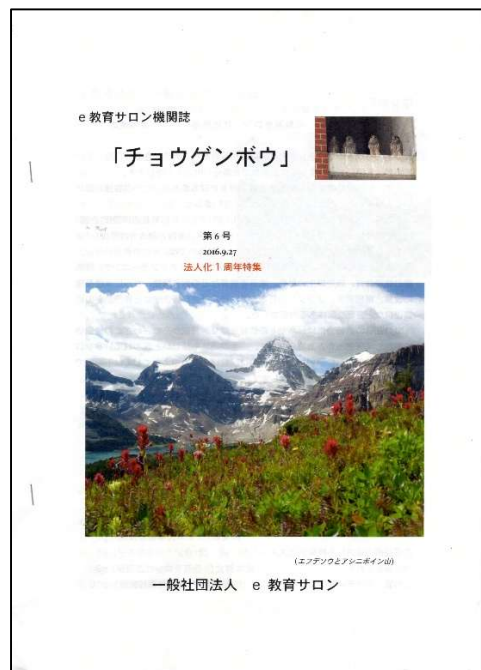


《2007.3.1 発行》

今、「海外紀行」は、その2000年から全てが並んでいる。地図と照合し、写真を選び、印象を述べ、行くと決めた背景も書いて、「自分の旅」に加工してきた。忘却はもちろん、お金も時間も、浪費では終わらせない！…と決意してきた証拠だ。

一方、月刊機関誌「チョウゲンボウ」の、表紙と、「山と花と」エッセーの方は、112回になった。日本と世界の山を混ぜて紹介。

これは4回り先輩の兎年、深田久弥に倣って…と、ひそかに思っている。日本の山と世界の著名な山の、両方を見てきての視点で魅力を語り、映像を披露しているつもりでいる。



《2016.9.27 チョウゲンボウに初登場》

映像機器の進歩も、また軌を一にしているようだ。元々は、妥当にネガフィルムを使いプリントして、子供達各自にコメント付きアルバムを作っていた。もちろん、山記録も、プリントしてのアルバム制作だった。

しかし、「石川県の山」などの原稿が、ポジフィルム提出だったために、高いポジを使うようになった。もうデジタルが出てきていたが、加工できてしまうことが、当時は信用されていなかった。

ワープロの方は、学研の教室便り制作のために習得していた。半端機種インターネット付きワープロは、OB 会事務局の運営の必要から、習得した。1993 年に再興した OB 会の連絡に、ワープロ印字は必須であったし、ネット通信なしには不可能だった。1995 年、Windows95 が発売され、いち早く、自在に遊ぶ先輩達も出てきた。CD-ROM でアルバムを送ったりの技術披露があって、PC で何ができるかを学び、使えるようになっていったのだった。

今さらながら、PC とワングル OB 会人脈のお陰で、記録整理も、編集も、映像送信も自在にやれるようになったのだ。

そもそも、山のスタートは、実家での家族登山からだった。さらには三男の誕生から、舟田家での家族登山はスタートしている。初宮参りの日の午後には二上山に出かけて、酔狂の 21 回目は、三男が 11 か月での白山日帰りだった。



《1987.9.6 白山室堂前》

家族全員が映っているその時の写真を、食卓前に追加した。41 歳の夫、36 歳の私、小 6 の長男、小 4 の

次男。記録では 3 時間 40 分で室堂へ。夫と息子二人がさらに登頂し、室堂からの下山は 2 時間 20 分（この頃はメモ記録）。若く、転倒とも無縁の登山をやっていた。そうやって「山へ拉致されていた」の苦情が子供達から出るほど、家族で遊んだ。今は、それぞれが家庭をもち、仕事と子育てに奮闘中だ。

誰も家族登山をやってはいないが、私達夫婦は何よりの大事な思い出としている。

デジタル機器と、夫のまめな作業のお陰で、それらの映像は、すぐ検索でき、照合できる。

礼文島で同行した人が、スケッチ風と、水彩画風の加工したものを送信してくれた。原画映像があれば、まだまだ遊べるということだ。これからの長い「うち時間」に、工夫して楽しんでいけることだろう。

振り返れば、自分の大事なものの全てに「山」が絡んでいたようだ。だから、「山から離れる」は、趣味が一つ減るでは済まず、抵抗感があるのだろう。

しかし、もう、85 歳ぐらいまでは無理なく続けられる生活スタイルに、切り替えねばならない。余力があるなら、そちらのリサーチに向けねばならない。

酷暑の夏が、過ぎようとしている…。

—完—